
銀の首輪の小英雄

凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の首輪の小英雄

【Zコード】

Z48840

【作者名】

凜

【あらすじ】

夢から覚めると男は牢獄の中にいた。手足を鎖で繋がれ、首にも銀の首輪が括り付けられている。ある時男は牢獄を逃げ出した。そして懸命に野を駆けた。すると逃げた先に居たのは傷を負つた一匹の竜。親しみの時を経て竜は死ぬ。そして男は力を得ていた。

成り行きと秘密の物語

残酷な描写がありますので

苦手またはお嫌いな方はあまりおススメ致しません。途中途中にロメディやほのぼのとした話を入れる予定ですが主にシリアルです。
御注意下さい。

現在更新休止中 早めに戻つてきます。
書き溜めはします。

序章

夢を見ていた。

私は王だった。

幾千の兵を従え行軍していた。

夢を見ていた。

私は蟲だった。

群れ行き最後には憮々散つた。

夢を見ていた。

私は物だった。

動くことなく永遠の時間に思えた。

夢を見ていた。

私は雲だった。

流れ行くその様は実に優雅だった。

夢を見ていた。

私は空だった。

眺めた景色は実に壮大だった。

夢を見ていた。

私には何も無かった。

孤独、寂寥、悲哀、幾つもの感情が溢れた。

私は、私は、私は一体

第一章 壱記「監獄の男」

男が目を覚ますとそこは牢獄だつた。

酷寒の牢内では吐息が白く幻想的に立ち込む。

目が覚めたばかりでは体が凍えているようでも思ひよつて動かすことができない。

少しの間、目を見開き微動だにしなかつた。

「またこの夢か……」

口を開いての第一声が其れである。

その響きにはどこか物憂げな雰囲気が感じられる。

「……寒い」

男は何も着ていらない。衣服の類を何一つ身に付けていない。全裸。

その肉体は痩せ細り、今にでも折れそうなほどに脆い。

「もう何度目だろう……」

物憂げな表情は幾分か晴れ、顔に表情が戻ってきていた。だが、それでも、まだ

無表情。

「ぐ、うう、あう」

呻きながらも懸命に体を起こす。
節々が鳴り、痛々しい。

「はあ

ため息とも、吐息ともとれる曖昧な息が発せられる。

男には記憶が無い。

何故こんな所に居るのか。
自分は一体何者なのか。
何時から此処にいる?
何時まで此処にいる?

いつも田を覚ますと真っ先に考へること。

もう何度も繰り返しだろう。

黒岩に覆われて出来ていて牢獄の壁をボーッと見つめていた。

「来たか」

おもむろに首を檻の外へと向ける。

牢獄の奥底から靴音が段々と近づいてきた。

近づくにつれ、靴音にも重みが増し腹に響くような大きさである。男の牢の田の前に歩み寄るのは、常人の倍はあらつ体躯と背を持つ偉丈夫。

「ぐうふふふふふふふ、まだじのじがんがぎたび」

舌が足りていなか、おつむが足りていなか、涎を垂らしながら一タニタと笑うその姿は酷く醜い。

偉丈夫の体は燃え盛るような赤い色。赤に相対するよつて蒼き剣を身に纏っていた。

「あよひせ、ビベヅなえやにいべど」

無理やりに立たされ、何も身に付けていない細い体を軽々と持ち上げられる。

軽く抵抗は見せたものの、肩にがっしりと締め付けられると逃げることは出来なかった。

「んはあーーはあはあああ。ふん、ふんふー」

何かの歌なのか、醜い濁声が牢内に響き渡る。

牢獄の中にはいくつもの区切られた檻が点在しているが人は居ない。

この広い獄内での唯一の囚人が今、拷問室へと運ばれていく。

「スルガベニ」

無作為に放り投げられ硬い地面に頭を打つ。
頭部に激痛が走り声が自然と漏れる。

視界が安定しておらず世界が歪んで見える。

元に戻ったときには既に拷問具に組み込まれていた。

「ほ、うれ、ぎよ、うは万力だ、どう」

周りを見れば、背の尖った木馬や真鎗で出来てゐるらしい雄牛、様々な種類の鞭、フォークが幾重にも重なつて出来たような形をしている鍔、外見が少女を模した鉄製の棺など用途も分からぬ物ばかりだつた。

氣づけば頭部を鋼鉄の輪に挟まれ固定されている。

ギリギリと左右で音が鳴るとともに頭の締め付けが強くなる

輪の内側には丸い突起があり、それが頭部に食い込む。

締め付けが強くなり、次第に我慢ができないほどの痛みが脳を襲

抵抗は出来ない。

痛みでそれどころではない。

頭が割れる

割れる、割れないの境目で上手く強弱をつけながら長時間に渡り拷問は続けられた。

寒さなどはもつ感じない。意識も途切れ途切れに痛みが波のよつ
に襲い来る。

体が揺れ、浮遊感が全身に伝わる。

不意に落^ハ下^スし手足^に鈍痛^が響^く。

どうやら元の牢獄に戻されたらしく安堵がの情が湧き上がる。安心と疲労が相成つて睡魔が襲つてきたようだ。

抗うことはしなかつた。

途絶えた意識の中、
黒岩の地面に木靈する、

竜の咆哮。

第一章モード「監獄の男」（後書き）

閲覧に感謝。

第一章 記「泡時」

男が田を覚ますとそこはやはり牢獄だった。

別に期待はしていない。

これが常、これが日常。

寒さに震え、苦痛に悶える。

それが常、それが日常。

「…………」

田を見開き無言を貫く。

黒き瞳に映るのは黒岩の壁。

「違う」

夜が過ぎ朝が来て田を開けばいつも思つたこと。
其れが今日は沸いてこなかつた。

「違う」

何かが違う。

何が違う?

一体……?

「夢を覗いていない……？」

男は夢を覗いていなかつた。
気づけば此処に居て、いつもみてきたこと。直ぐ傍に片寄つて共
に生きてきた。

常、日常、いつも。

非日常は突然にやつてくる。

「この日は男にとって革命の日となる。」

これまで経つても醜い偉丈夫はやつて来なかつた。

常は、日が昇りきつた時に決まってやつて来る。
だが今日は日が昇り、傾き始めても未だに来ない。

やはり何かが違う。

凍える身体を無理矢理動かし、檻の出入り口へと近づく。
施錠されている筈の扉へと手をかけた。
そつと極小さな力で扉を押すと、きいといこう音を立ててゆっくり
と扉が開く。

一步、二歩と歩みを進め牢の外へと踏み出した。

「……嗚呼あ

男の頬に涙が伝づ。

必死に留めようと上を向いたがそれでもまだ溢れてくる。

思えば、男は此処に居てあんな仕打ちを受け続け、一度も逃げ出

そなどとは考えたことはなかった。

凍え死になつても、苦痛に呻きながらも、一度も逃げ出さ
うとは思わなかつた。

「外……」

三歩、四歩、五歩、六歩、と順々に足を動かす。

土を踏み締め腰に力を入れる。

地面は抉れ足の裏に泥が付着する。

黒岩の地面に比べ温かいその土塊からは芳醇な香りが漂つ。

目の前にあるのは光が漏れるこの牢獄の出入口。

いつも此処から偉丈夫はやって来る。

この先には未だ見ぬ世界が存在しているのか。

男は扉に手をかけ勢い良く押し開けた。

煌々と差す日射が何かの鉱石らしき物に乱反射し辺りにまたたく。その様は、まるで光が蒼空から降下し煌びやかに揺れ動いているかのようだった。黄と碧に包まれた空間は慣れない瞳に痛みを与えるほどに美しい。

目が慣れてくると次第に、凝然としているこの場所がどんな所なのかが見えてきた。

足をついている此の場所はさながら処刑台であり、男はその上に佇立する囚人に見える。

処刑台の周りには段々になつている観客席のようなものが敷き詰められていた。

観客席からは囚人を見下ろす形になるのだろう。だがこの場所において全てに共通する事柄が在った。

全てが既に風化していたのだ。

赤茶けた処刑台の扉、緑黄の薦の這つ壁、罅裂し原型を留めていない観客席。

全てに於いて時が過ぎ去つていた。

「これが外？」

男の顔には驚愕と落胆の色が見て取れた。

「そんな筈は……！」

夢を見てきた。

外は、夢のように壮大で優雅で儂く永遠で豪奢である筈だ。
今一度あの夢のような光景を目にすることはできないのか?
これが全てなのか?
これが世界なのか?

男は嘆き悲しんだ。

嗚咽は響き反響する。

反響した自分の泣き声と共に何かが微かに聞こえてくる。

「…………咆哮？」

苦しんでいるような、怒り狂っているような、絶望しているような
そんな感じの鳴き声。

其れは徐々に大きくなったりとしたものに変化していく。

地響きと地鳴りが同時に耳に入るよつになると身体は勝手に動き出していた。

「行かなきや」

男は走る。懸命に走る。運動などとは無縁だった身体で。激痛に耐えながらも走る。

風化した観客席を駆け上り薦の這う壁をよじ登る。
その先には荒涼とした砂地が辺り一面に広がっていた。

まだ諦めない。

首をあらん限りに振り回し視界の先に何かが無いのかと捜し求め
る。

その間にも咆哮は大きくそして強くなっていく。

「……あれは

田を凝らし一点を見つめ続けると辛うじて視認できるほどの大きさで羽ばたく『何か』が見えた。

その何かは一目見てあるものだと確信する。

降り立った場所へと再び走り出す。

痛みなどは感じない。

心にあるのは好奇心と同居する高揚感だけだった。

第一章記「泡時」（後書き）

閲覧とお気に入り登録に感謝

第一章参記「竜」

荒廃した大地に相應しくない木々が鬱葱と生い茂る深山幽谷。今そこに降り立つ尊大な存在があつた。

漆黒の鱗に全身を覆われている。

節々から鋭利な棘を生やしその爪と牙からは毒々しい液体が滴り落ちている。

豪富な宝石にも負けない輝きを持つ瞳と山をも飲み込めそうな大顎を持つその巨体は、

時折、息苦しそうに呼吸を繰り返している。

呼吸を繰り返す度に見え隠れする生々しい傷口のあるその背には無数の鉄塊が突き刺さっていた。

竜

この世で敵う者はいないとされる最上の種。

誰もが崇め誰もが敬い誰もが慄く。

その存在はその位置する空間に蟻の一匹も入れることを許さない。

それがどうだろつ。

竜の目の前には風采の上がらない貧相な身体をした人間がヨロヨロと立ち尽くしている。

「はあ……はあ……はあ……はああ」

肩で息をしている男はその姿を見せてから竜への視線を外すこと
はなかつた。

竜も男も相手を見続ける。
無音。

森林の樹木達が耳へと音を届けるのみ。
永遠の時間にも思える。

遂に一方が口を開いた。

『何故此処に居る?』

音を発したのは大口を開いた竜だった。

『何故此処に居る?』

再び疑問を呈する。

「お前が見えたから……」

返答は単純で簡素なもの。

『此處はお前の来るところではない。眠りを妨げおつて。起き掛けに見るのが美味そうな肉ならまだしも、人間の顔など見たくも無いわ』

い。
竜の口から発せられる音は必ずしも人間の理解できる言葉ではな

耳に入るとしても唯の唸り声としてしか受け取られないだろう。だが、男には何故かその意思が伝わっていた。

こんな人間など今まで見たことがない。

ましてや自分の姿を目視して逃げずには居られない筈。

「そんなことを言つても、お前怪我してゐるじゃないか」

男の声の後に再び長い沈黙がやつて来る。

だが、またしても沈黙を破つたのは竜だった。

笑い声。

これもまた常人には唯の鳴き声としか取られない。
それでもやはり男には伝わっていた。

男の顔にも明るい表情と笑顔があつたのだから。

恐れおののき、恐怖し、絶望する。

竜の追憶の彼方に残る人間の思いはそんなものばかりだった筈だ。なのに、この男は怖がるどころか傷口の心配をしているというのだ。

これで笑つておらずにはいられなかつた。

滑稽、変わり者。

だが、それはそれで興味も沸いてくるといつもの。

『お主、名は?』

「名前? 無いよ」

『む? どういふことだ

「名前を知らないんだ。自分の」

世界の最上種と会話をしているといのも凄まじいがその胆力もまた凄いことだ。

無知は罪、とでも言つつか。

「君は?」

『私が？ 私の名前か。 そうだな、強いて言つならば

』

フェルニゲシユ

『そう。 フェルニゲシユ。 うん。 其れが私の名前だ』

面白がるような目つきでこちらを眺め、微笑している。
何が可笑しいのかは男には分からぬ。
分かる必要は無いのだ。

「フェルニゲシユ。 良い名前なの、かな？」

竜は微笑から苦笑へと笑いを変化させた。
その様相はさながら困った父親のようだ。

『ハツハツハ。そうだなお前達人間の中ではどうなつてているのか知らない、知りたくも無いが私自身はこの呼び名が一番氣に入つた』

「うへ、御免……気に障つた?」

様子を探るその姿は、竜からすればまるで愛玩動物の仕草をみているにも等しかつた。

『愛らしいとでも言えばいいのだろうか。

『気にしなくていい』

既に竜からは霸気が消失していた。

いつの間にか有つた筈の圧迫感が解け、随分と楽だ。

竜と男の周りにも、生けるものが姿を現し本来の森林の姿を取り戻していた。

「面白いね。外にはこんな所があつたんだ」

木々の間を縦横無尽に駆け回る小鹿の群れ。
枝々に飛び移り器用に木の実は食む栗鼠達。
清流の流れに逆らい力強く泳ぐ魚。
色とりどりの花、草、葉。

全てが男にとって新鮮だった。

『嗚呼

森の深奥に佇む一人の男と一頭の竜。
不釣合いなその光景は木漏れ日に照らされどこか神秘的なものだ
つた。

第一章参記「竜」（後書き）

閲覧とお気に入り、評価して下さった方々に感謝。

第一章肆記「御伽噸」 上

竜と男の邂逅からある程度の年月が流れた。

男は時間の経過と比例するように知識を得た。

動物のを捕まえる方法。

魚を捕る方法。

木の実の判別。

食事・調理の仕方。

衣食住に関する知識。

その土地による最適な身の運び方。

身を隠し相手に気づかれない方法。

体術。護身術。

体の使い方。

全てが竜によるもの。

口で人間は嫌いだとは言つが思いの外、人間社会に精通していた。

「フェルニゲシユ。君は何故そう天邪鬼なんだい？」

『何が言いたい』

「君は、口では人間なんぞ嫌いだ。なんて言つてるけど、それがどうしてこまでも色々な事を知つているのか不思議に思つてね」

『そんなことか……』

竜 フエルニゲシュは嘆息を吐き懐かしむような口調で言った。

『私はお前達の考えが及ばない程太古から存在している』

『太古には人間と竜の共存の世界もあった。そこにはある事柄一筋に恐ろしいほど熟達した者達が大勢いたのだ。木匠、工匠、棟梁にも掛け合いもした。狩人に効率的な狩獵の方法を学んだ。生肉しか食べていなかつた我々に味の付いた食事を教えてもらつたのも人間だ。知識人に文化というものを受け取つた。竜の歴史の根幹にはいつも人間が居た。まあ難しい事を言つてもお前には分からぬだらうが……』

『いや、何となくだけど分かるよ。だけどそんな事を聞いたら益々不思議に思うよ？ 何で人間が嫌いなのさ？』

疑問が疑問を呼ぶ。

それほどまでに親しみを持つていたならば憎むべき対象にはなり得ない筈だ。

共生をなしていったといつのならば均衡もとれていたのだろう。なのに何故？

『ふむう…………本当にお前は何も知らないのだな』

竜は首を傾げ、物思いに耽るよつて空を見上げる。
その情景はまるで老いさらばえた老人が日向に出て茶を飲むようにも、

聰明な青年が息抜きで日光浴をしている時のように見える。
要するにぼーっとしていた。

『一つ、御伽噺をしようか』

どこか遠い遠い見知らぬ国に、大層見目麗しい美しき王様とお妃様がいた。

その二人は婚儀を行つてからまだ田も浅く、それでいて仲睦まじいとてもいい夫婦。

珍しいことに、この二人は政略結婚などではなく恋愛の末の婚姻といふその仲の良さが納得のいく関係だったそうだ。

その国では、王と妃の事を蔑ろにすることは出来ないよう法に定められており、妃にも王と同等の権力が与えられることになつていた。

もちろん正式な側室として迎え入れられるには乙女であることが必須であり、婚前に手を出すなどは持つての他だ。

王が初めて妃の身体に触れることが許されるのが、婚儀から一度上弦の月を垣間見ることができた後であり、それまでは絶対的な禁欲を押し付けられるのだ。

王様はそんな生活にも耐え、上弦の月を見ることができ、意氣揚

々と妃の待つ寝室へと駆けていったそつな。

長い夜の末、無事に初夜を明かすことが出来、安堵と幸福感に包まれる王宮。

早朝、妃の悲鳴が宮内に響き渡る。

王宮の皆の安堵が一瞬にして焦燥に変わる。

何事かと自室に戻っていた王様が妃の寝室に入るとそこには、

血塗れの寝衣を着て、頬に涙を伝わせる、黽めた顔をした、妃が佇んでいた。

王様が事情を聞くと

「夢に化け物が出てきて、お前には子供が出来ないと囁かれた。目が覚めても夢を思い出して怖くなり、寝具から離れようとすると純白だった筈の寝間着と寝具が真紅に染まり何かの紋様が浮かんでいた」

と。

後に妃の親身には傷一つ無かつた事が分かり、更に此の面妖な事
件が表立つようになった。

その後、数年に渡り幾度と無く一人は身体を重ね合つたが終ぞ子
供ができる事は無かつた。

愛子に恵まれることがなく、隣国との戦争に王様との蜜月も少な
くなる。

自身の不甲斐なさに気を落とす御妃様。

何とかならぬかと國中の呪い師に掛け合ひ、子宝に恵まれ
ると言われる妙薬にも頼る。

だが、やはり継子が生まれることは無くとうとう婚儀の日から十
年が経とうとしていた。

十年田の一度その日。

庭園を眺めていた妃が一人の老婆に田を留めた。

暇を持て余していた妃は暇つぶしことその老婆に話しかける。

すると、老婆だったはずの其れば、醜怪な物体へと変わり果てる。

物体は言つ。

今日の日没に皿を庭の西北に裏返して置いておく。

その後、日の出の時その皿を取ると紅白の秀麗なバラの花が咲く。

赤いバラの花弁を食べれば男の子、白いバラの花弁なら女の子ができる、と。

妃は欣喜雀躍きんきょうらくやくした。

早速、提言された事を行動に起じさせようと走り去りつとした時、再び物体は言った。

ただし、絶対に二つとも食べではない。欲に負けて食べてしまつたこの国に多大な災厄が降りかかるであろうと。

妃は興奮のあまり、話し半ばにしか聞いていなかつた。

皿没後、言われたとおりの場所へ行くとそこには裏返しに置かれてある豪奢な皿があつた。

妃はそれを見つけると益々興奮し、日が明けるのを今か今かと待つていた。

時が満ち、陽光が暗闇の中から煌々と顔を出す。

すると、妃の皿の前で不可思議なことが起こつた。

光輝が豪奢な皿に反射し、皿の紋様が立体的に[写る。

その紋様はいつの日か見たあの紋様であり、恐怖が蘇る。

身を震わせながらもその様子を凝視していると、閃光が彩光に変わり彩を増す。

それはこの世のものでは無い物の様だつた。

赤、青、黄、緑、紫、白、黒。

色光が織り成す形は薔薇の花。

茨から花弁、雄蕊や雌蕊。

その細たる形象は刺々しい薔薇が優艶に見えるほどだ。

具現化されたそれは真紅の花弁と純白の花弁を持つ薔薇の花。

得体の知れない物体の言つていた事は眞実だった。

輝いて見える一色の薔薇を摘み取り手に乗せる。

真紅は引き込まれるような赤。 純白は穢れを知らないような白。

これを食せというのか。

妃はこれまでに美しいものを見たことが無かった。

諸国からの贈り物として受け取る宝物や装飾品を超える至高の一品。

だが、これを食べなければ子を殺すことなどできない。

意を決し、赤い薔薇を口一杯に頬張った。

花弁を一房噉んだ時、口一杯に広がる芳醇な香り。

花独特のあの匂い。

それが何故だろう。

美味しくて美味しくて仕方が無いのだ。

また一房食む。

更に強く香る匂いと味。

薄い、とても薄い花びらの筈がまるで、肉厚で脂のとじたもの。

た肉を口一杯に頬張ったかのようだった。

噛めば噛むほど味が広がり留まる事を知らない。

いつしか、妃は薔薇の花を食す事に夢中になっていた。

薔薇の魅力の虜となってしまったのだ。

食べて、食べて、食べ続け、遂には赤い薔薇が底をついた。

空腹時に感じるあの焦燥感がやつてくれる。

食べたい、食べたい、食べたい、食べたい、たべたい

薔薇の魅力に魅入られた。

『欲に負ける』とはこのことだったのだ。

白い薔薇を食べてしまえば子をなすことが出来なくなる。

それだけは嫌だった。

王様の辛い顔を見たくないのだ。

早く子供を作つて、笑顔を取り戻したかった。

だがそれでも薔薇の魅力は引けを感じない。

どうしても諦めきれない。

相互の意思が鬪^せき合い頭痛が走り地面に倒れ伏してしまつ。

暫くして身動きが止まりフラフラと夢遊病者のような挙動で立ち上がる。

白い薔薇を摘み取り、そして……

口にした。

第一章肆記「御伽噺」 上(後書き)

更新遅れてすいません。

御伽噺は上下の予定。

閲覧とお気に入りに感謝。

ユニーク数1000突破。

今後ともよろしくお願いします。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりソーラン節を踊りだします。

第一章五記「御伽噺」 下

月が満ちれば妃のお腹も大きくなつた。

隣国との戦争も条約の締結により休戦状態となつた。

帰還した王様は妃の妊娠を聞いてこれまた狂喜乱舞したそ�だ。

何も心配することの無い幸せな時。

だが、やはり、幸せは崩れ去る。

お腹の子が産まれいざる時あの老婆が再び妃の前に姿を現したのだ。

老婆は言つ。

災厄が訪れる、この運命からは逃れられないだろうと。

その言葉を聞き顔を青ざめる妃。

周囲の者は老婆の無礼な物言いに癪癩を起しきの場から離れる
よつ妃に促した。

護衛に引き連られながら背後を振り返ると老婆は何処にもいなか
つた。

日付けが変わり遂に赤子の鳴き声が響き渡る。

それは咆哮。それは怒号。それは絶叫。

そう、赤子はなんと一匹の竜だったのだ。

王と妃は嘆き悲しんだ。

恩恵を受けたといふのにこの有様。

崩れ落ちる王に竜王子は言った。

貴方が私の父なのですね、と。

王は否定する。

人間でないお前は私の愛子などではない、と。

再び宮内に響き渡る大音声の聲音。

貴方が私の父と認めないなら、城も宮も貴方もこの国もその全てを叩き潰す、と。

王は決意を迫られる。

王は苦慮する。

王は決断する。

竜王子の成長は異常だった。

三月も経たぬうちにその体躯は伝説に語られる竜の身の丈に匹敵するほどの巨躯へと成長した。

爪牙は鋭利に伸び、顎には不規則に動く髭の様なものが。

紫水晶の煌めきを残す鱗を身に纏い黄金の瞳を有す。

尊大、偉大、寛大。

全てに於いて大きい。

竜王子が誕生して十五年。

唐突に妻が欲しいと言った。

無理だと王は言つたが國を潰すと脅され、隣國の王女を迎えることとなつた。

竜王子が待つ寝室に通される王女。

数瞬の後、王女は命を落とす。

竜王子が食べてしまつたのだ。

再び竜王子は妻が欲しいと言つ。

王は抵抗が出来なかつた。

人を食す口実と分かつてはいた。

だが、それでも抗うことは出来なかつた。

一人目の王女も竜王子の腹の底へと消えていく。

連れて来た王女達の国からも、娘を殺されたと戦争に発展する。

その後も、幾人もの女性が竜王子の腹へと向う。

竜王子の食欲が欠くことは無く、むしろ日に日に増していくほどであった。

国の士気が猛ることはない。

国家間の戦争による土地の荒廃と人民の疲弊。

更には竜王子の妻の娶り。

人民には謎の奇病が流行り、宮内の者達も多く倒れたと伝えていた。

無論、正室や側室として娶られた女達も例外ではない、と。

だが、そんな事が虚言であることは皆黙認していた。

竜王子の存在は宮内、城内の奉公人や騎士達によって内外に漏洩していたのである。

その存在の恐ろしさ、禍々しさ、それに伴つ神々しむは国中に蔓延していたのだ。

抗いようが無かつた。

抗うことが許されない状況へと陥つていたのだ。

今宵もまた、美しき御仁が竜の血肉へと変わり果てる。

『御伽嘶はこれで終わりだ』

「へえ……え？」

『オチも何も無いのだよこの御伽嘶は……強いて言つならば今後この国は竜王子に苦しめ続けられ遂には滅んでしまいましたと。なんて終わり方も聞いたことがある』

男は愕然とした。

これではあまりにも酷すぎる話ではないか。
救われるべき民の苦しみも王様と妃様の幸せも糞もない。

「こんな話が本当に御伽嘶として語られているといつののか？」

納得がいかなかつた。

男は自分の知っている御伽嘶は全て勇氣に満ちていて、正義とは

言えなくとも少なくとも主人公が何かを救い、助け、導く、そんなものだと信じていた。

まるで小さな子供のようにそれに嬉々と耳を傾けていた自分が惨めになつた。

『御伽噺や伝承なんてものには戒めの氣を込められて作られたものが沢山あるんだ。主人公がいつも正義とは限らない。お話の主人公を反面教師として子供達を戒めて縛る事もある』

「それは、良い事なのかい？ 悪い事なのかい？」

男には善悪の区別はまだ分からぬ。
だからこそ聞く。

『人間達としては良い事なのかもしれない。だが我々の立場としてはあまり良い事ではない。確かに戒めのおかげで人間達が我々に近づくことはなくなつた事は事実である。だが人間達も我々も互いを嫌い合う輩ばかりではないのだ。昔の思い出を追つて、竜の記憶に永劫残る仲たがいをした我々と人間達の仲を再び戻そうとし竜はいた』

『我々の長き命と違ひ人間は短命だ。我々が長きに渡る因縁として残している記憶も楽しげな思い出も今続く現実として視覚していることも、人間達は忘れ去つてはいる。文献や伝承には文化として残るが、そんな素晴らしいものを手にすることが許されるのは大抵が人

間社会で富裕層と呼ばれる者達ばかりだ。少数ながら本来の我々を理解し打ち解けあう者もいたのだがそんな輩は異端者として、友好を図った竜族は化け物として、迫害された『

『まあ、何が言いたいのかと言つと、大人の戒めと言つ名の欺瞞で出来た伝承を子供達が真に受けそれを信じることが我々は許せないのだ。人間社会での規則や規律の保持の為に作り話をするなんて事はまだ許せるが、それを超えた事実無縁の所業を作りたてさもそれが当然だというように広まつていくのは我慢なら無い。それが我々も我々の良き理解者をも破滅に導くのだから』

「えー、えええと……？」

『ふむ、要するに子供の教育の出汁に嘘の噂を流されて、我々も本当の理解者も迷惑しているのだよ』

「嘘？」

『嗚呼、例えば我々は人を襲つて食べるとは言われているが人肉は基本食べない。食べれないのだ』

「でも、自分に会つた時は肉が食べたいって……」

『アレは齧しのよつたものだ。それにお前を食べたいとは言つてない』

『話を戻すが、その出汁が肥大化して恐ろしい有らぬ存在が我々として人間達に住み着いている』

『そのおかげであんな御伽噺が出来上がってきただの。そしてそれを聞いた子供達がまた違つた認識を得る。そしてその子供達が成長して なんて事の繰り返しだ。あの御伽噺はそれの一端だ』

「負の連鎖……？」

男に善悪はない。が、それは誰もがそうである。
人には人のものさしがある。

ある事柄に対しても百の者が集まれば百の解がある。
ものさしの長さが足りなかつたり、長すぎたり。
色が付いていたり、真つ直ぐではなかつたり。
多種多様なものさしが存在している。

それはこの男も例外ではない。

男は男の、自分のものさしで田の前の物事をはかつたにすぎない。

『その通り。堂々通りだ。どうしようもない。抗いようが無いんだ。
御伽噺の王様の様にな』

第一章五記「御伽噺」 下（後書き）

御伽噺はこれでお終い。

男は記憶が無いばかりに純粋です。

竜の主觀だけを丸呑みしてしまいました。

あと口調が安定しませんね……

伝承や童話など様々な御話の中にも侮蔑的な表現や偏見の目だつて入っていることがあると思います。

まあ、どう解釈するかは人それぞれですが……

すみません

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりフラダンスを踊りだします。

第一章陸記「進軍」（前書き）

場面が変わります御注意ください。

第一章陸記「進軍」

荒廃した土地。

砂塵の舞う広大な砂漠。

そんな荒蕪の地に仰々しく馳せる大軍団があつた。

掲げる旗は法王の尊厳さを象徴したもの。

白銀と黄金の剣を交差させ、その中央には巨大な十字架に五重冠を真紅の糸で括り付けるという構成。

白銀と黄金の配色は法王庁直属の騎士達の鎧と兜をモチーフに。一対の剣は開祖が常用したとされる聖剣。

法王の宗教上保持している権力を五重冠で表している。

馳せる軍団の装束も戦をするといつよりも社交界にでも突撃しようとするかの様な正装。
やはり何處か仰々しいものだった。

「ねーねー、デニス副長おー。やっぱさつきの町にいた巡礼の親子、
けつこう美人でしたよー。母親の方とか副長の好みじゃなかつたで
すか？ 娘の方もあと幾年も経てばとびつきりのものになると思いま
すし」

銀の帷子に狐らしき動物を模したお面だけというなんとも不可思議な出で立ちの男が、並走している髭面男に話しかけていた。話しかけられた男はどうやらこの大軍団の副団長らしくその出で立ちも

他の者とは違ひ唯一鎧と兜、武具を装備している。

「『の』ド阿呆！！ 貴様はいつもそんな感じだがな、今回ばかりはそつはいかんぞ。我々法王庁直属第六大隊が初めて貌下の勅命を承った今回の任務。失敗しては一生の不覚！！ 心して掛からねばといつのに、まったくニコスお前ときたら…… ぬう『の』の罰当たりめ！」

狐面の男、ニコスは髭面の男の熱血に当たられたらしくゲヒと舌を出してげんなりとしていた。

元々、『の』法王直属第六大隊またの名を無用の長物軍団や『の』軍、お坊ちゃん軍などと呼ばれている『の』の軍隊はその一つ名の表している通り、全く使い物にならない軍団として法王庁内では知られている。それは兵士達ほとんどが何処かの有力貴族の跡目や婿などでその命を戦に取られたくないという思想があり、ステータスと唯の安全策のために作られた大隊だからなのである。もちろんそんなぼんぼんの集まりにわざわざ上の役人が戦の命を出す筈がなく、実践の経験など皆無なのである。

そんな未熟な軍隊が初めて命を受けたその内容は、

リビュア渓谷に降り立つ奇跡の顯現をその瞳に收めよといつものだつた。

当初「」の命が、神明のお告げがあつたと法王の口から下されたときは天上天下物情騒然の大混乱だつた。

その時分に法王庁に残された軍は第六大隊しかおらず、その他の大隊は全て出払つていたのだ。

各大隊を呼び戻す訳にもいかず急遽、第六大隊が勅命を受けることになつたのだ。

役人の中には最後まで渋つていた者も居たのだがそれも終いには承諾することになる。

「むう……しかし、一体全体どういうことなのだ？」開祖様が記した默示録にも記載されていなかつたそうじやないか、この事象は。そんな事があるとは思えないのだがなあ」

「そりですねえ、まあでも、そもそもおその開祖様の默示録つて物自体僕達は見たことも触つたことも無いのですから、怪しいもんですけどね……」

「ぬ、ニコス、それ以上はあまり口を利いては異教徒と見なされるぞ。やはりお前さんは少し口の利き方を学んだ方が良いのではないのか？」

「おっと、これは失礼。以後気をつけますよ。副長さん」

砂漠越えには忍耐と胆力が必要だ。

両とも備わつていなければ砂漠を越えるというのは自殺行為にも等しい。

お坊ちやま達にはやはり厳しかつたらしく既に数人の脱落者を出していた。

そんな過酷な状況で優々と談笑をしているこの一人は案外、つわもの兵な
のかもしない。

幾日も砂漠を渡り歩き、永遠とも思える時間突き進んだ。
されども終わりは見えてこない。

脱落者の数も日に日に増えていく一方だった。

脱落者が増えればその運搬にも治療にも人員を割かなければいけ
なくなる。

予想を超えた消耗の早さに団員は驚きを隠せなかつた。

「副長！… とうとう医薬品が底をつきました。食料類も段々と減
つてきておりこの儘では大隊が持ちません。今から引き返せば最寄
の町には辛うじて着けるでしょうし、この砂漠は終わりが見えませ
ん。そのリビュア渓谷というのも何処にあるのか明確には分からな
いじゃないですか」

食料、医薬品、武具などの蔵数の管理を担う団員が軍の現状との危機についての弁舌をしている所だった。

団員の意見は至極真つ当なものでこのまま徐おもむろに突き進むと大隊が壊滅するのは必然であり避けられない決定事項。

「むう、ぬう、ぐううう……」

白慢の髭を撫で繰り回しながら悶える男の姿は酷く滑稽で正直近寄り難かつた。

だが、悩むことも仕方が無い。

最寄の町で食料補給を行つた際、砂漠越えを数多く経験している行商人に渓谷の位置を教えて貰い、大雑把で酷い出来だが砂漠の地図も書き記して貰つっていたのだ。

その地図によると後もう少し行けば清流の流るる渓谷が待つているらしい。

「一人で悩んでいても無意味だな。団長に相談してみよう」

野宿のための仮住いを組み立て、集まり焚く暖の光はまるで此処が一つの村の様に錯覚させた。

そんな温かな光に包まれながら、デニスは中央に位置する大やぐらの中へと入る。

「キシリニア団長」

やぐらの中はとても広くその中央には会議用の机が配置されている。さすがに椅子は用意していないが、それでも戦に不釣合いなほど十分豪華な物だった。

デニースが奥へ通る時には既に幾人かの騎士達が机を囲むように立っていた。

「む、談義中でしたか。これは失敬。出直してきます」

談義中とは言つたがその様相を見ればまるで若い者どうしで乳縄り合つてゐるようになしか見えない。

「待て、デニース。変な勘違いをされたまま帰しては後々面倒だ。こつちへ来い。丁度お前を呼ばうとしていたんだ」

会議用机の周りに佇んでいるのはこれで計五人。

- 南方にキシリア
- 北方にデニース
- 西方にニコス
- 東方に蔵数管理者
- そして入り口を警護する憲兵一人。

議会は始まった。

「さて、奇跡を瞳に収めるための方針を、と言いたい所だがそうにもいかない。先ずは今後どうするか、だ。」

特徴的な白銀の髪を結いながら、結構重大な事をズケズケと言う。キシリ亞は本来大貴族の嫁へと出される筈だったのだが本人が強く（生半可なものではない）拒んだため縁談が成立せず両親が仕方が無くこの第六大隊に入隊させたのだった。キシリ亞自身も武道の道を行きたいと常々思つていたらしく入隊後瞬く間に団長の座に登りつめた。大貴族の嫁に成る筈だつたその容姿は醜いはずがあるわけが無く誰もが見惚れるほどの美貌がある。発展途上ながらもしなやかで豊満なその体に相成る夜空に浮かぶ銀糸の如きその白髪は誰もが望みゆる。

団長に登りつめただけあつて剣術もそこそこに強い。
勝気な性格故なのか意中の人ができることが多いことに多少コンプレックスを抱いている。

部下には厳しい彼女だが密かなファンが急増していることは知る由も無い。

「食料、医薬品等の蔵数によると持つて十日。ギリギリで町に着けるかという程度です」

「では、もつと節約・儉約を心がけるように伝令を出せば、多少は期間が延びるのではないか？ その延びた期間を探索にまわせばいい事ですし」

二コスが珍しく人の物言いに噛み付いていたことに少しテニスは驚いていた。

「それは無理です。例え節約・僕約を徹底しても医薬品だけはどうにもなりません。規定量をちゃんと投与しなければ無意味ですし、このまま進軍していると更に脱落者が増えるでしょうから。それに僕約令を出せばさらに士気が下がる事が考えられます」

「そう、ですか……」

二コスの反論に事実を突きつけられ暫くの間沈黙が続いた。

「ふむ、万事休すとはこのことか。情けない」

一度最寄の町に帰還するといつのは実質的にこの任務を放棄、もしくは失敗したということになる。

なぜならば、帰還の際にも脱落者は出る。脱落者達は一朝一夕では回復することが出来ないので、少数で奇跡に挑まなければならなくなる。その先にはどんな危険があるのか分からぬ、だからこそ大隊を率いてやって来たのだ。つまり少数で挑むことは敗北に等しいのだ。

まさかの役人様も自然の脅威に負けて帰ってきたといつ言い訳は聞きたくないだろう。

「選択肢は無いよつですね」

じゅりにせよ危険はあるのだ。
ならば希望に賭けてみよう。

そう決意したのだった。

話し合つたあの日から丁度十日経つた。

蔵数管理を担う者の言つたとおり脱落者は更に増え続け食材も医
薬品も底をつきかけている。

絶体絶命。

もう逃げ場は無かつた。

最後の希望に賭けた。大隊の中で一番早駆けが上手い者を、リビ
ュア峡谷が位置する筈の場所へと駆けさせていた。これで渓谷が見
つかなければ再び無能の烙印が大隊に焼き付けられることにな
るだろつ。

神に祈るしかなかつた。

暗黒が空を覆い妖艶な月が顔を出す。

ゆっくり、ゆっくりと。次第に陽光も弱くなり薄暗くなる。
誰しもが諦めた。
もう駄目だ、と。

日は落ちる。

微かな希望に縋り付く姿は醜いだろうか。
微かな希望に縋り付く姿は滑稽だろうか。
微かな希望に縋り付く姿は不甲斐ないだろうか。

夕暮れ
闇が赤き空を侵食する光景はまさに絶景。
常闇がやつてくれれば月明かりに照らし出され星を見上げるだろう。
だが、星を見上げる時間にしてはまだ早い。

「おお神よ……！」

暗闇の中に一条の光が浮かぶ。
それは温かな橙色をした炎。
次第に聞こえてくる馬の蹄の音。
そして、

「ありましたああああ！－ 団長、キシリシア団長！－ ありました
！－ 渓谷です！－ リビュアです！－」

早駆けの蹄の音と騎手である男の叫び声。

待ち望んでいた全ての団員達には至福の音色と化したことだらう。

抱き合い、嗚咽し、涙する。

夜空に汚い、それでいて熱い音が流れるだらう。

今宵、リビュア渓谷にて男達の雄叫びが響く。

第一章陸記「進軍」（後書き）

やつてることはあるまい大した事じゃないんだけどなと書いてて思つた。

毎度の事ながら更新遅くてすいません。努力します。

さあ次はいよいよ主人公達との邂逅です。

一体全体どうなるのやら。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりはだか踊りを踊りだします。

第一章 漆記「予期せぬ邂逅」

早朝の日射といつもの憂鬱な心を擲けさせてくれる。澄み切った空氣もまだ冷たいが逆にそれが気持ち良いとも思えた。

清流流れるリビュア渓谷。

谷へと入るその入り口で仰々しい大軍団は束の間の休息を得ていた。

「二口ス、渓谷の深奥の様子はどうだった？」

「そうですねえ、何と言いましょうか……まあ一言で言ひと秘境？いやあ、ちよつと奥へ行つただけで周りが全く見えなくなつて、それに伴い日差しも木々の樹冠に遮られ差し込まれないものですから、馬も怖がつちゃつて注意して進めなければ危ない所でした。それに薄暗くて何か出るんじゃないかと思いましたよ本当に。僕お化けとか苦手なんで勘弁して欲しかったです」

「お前の事など心底どうでもいいのだが、やはり森林の方を大群で行くには厳しいか……？」

「もう、少しは心配してくれたつていいじゃないですか。そんなん

だからこの歳になつても男が出来ないんですよ。」

「余計なお世話だあ！！！　お前には関係の無い事だらうが！！！
聞かれた事に従順に答えろよ！」

「もう連れないと。でもそんな所がス・テ

」

騒々しい団長の断絶を剽々と受け流しながらふざけていた二コス
だが、キシリヤの般若と化した顔貌に恐れ戦きお茶田を中断せざる
を得なかつた。

「ま、まあ、おふざけはここまでにしてしましようかねえ。そ、
そうですねえ、やつぱりこの人数では無理があると思ひますよ」

渓谷発見から五日が経つていた。
食料も確保し、脱落していた団員達も次第に元気を取り戻してい
る。

ある程度の人員を確保できた事により渓谷の調査を決行したの
が、結果は二コスの報告通り。

「やはり河川を横切るしか先に行く方法は無いのか、困ったものだ

な

隆起した巨大な崖に挟まれて存在するこのレビュア渓谷は森林がその大半を占め、人間の手出しなど一切受け入れないかのように出来ている。

森林には辛うじて人が通れるぐらいいの広さの獣道はあるがそれもこの大人数では時間が掛かってしまう。

自ずとその他の方法で進まなければならないのだが生憎、他路には様々な障害があり結局は川を渡らなければならなくなつた。

「河川は激流とそうでない所が有つたりしますので、川に沿つて一度進軍し流れの比較的穏やかな地点で横断すればそこまでの危険性は無いと思いますがねえ」

「それでも、病み上がりの団員達にはきついものが無いか?」

「それはもう自業自得というか、自分たちの体力の無さに悲観してもらわないとどうしようもありませんよ。こればっかりは

「そうは言つてもな……」

「早くしないと奇跡の場面に遭遇できないかも知れないんですよ。これでも予定よりかなり遅れてるんですからもう形振り構わず進まないと

一コスの切言通り、自分達で規定した所定の期限は既に過ぎ去っている。

それでも法王は明確な期限や期日などについては何も述べなかつた。

といふことは未だ奇跡は起きていないといふ可能性もあるのだ。

「選択肢が無いものな、良し。では一コス、あの髭男もといデニス副団長を起こして來い。その後全小隊に伝令せよ。本日中に渡れそうな箇所を探し出し、明日の明朝には渉り切る。未だ体調が万全でない者は此処に置いて行くが、それ以外の者は準備を怠るな、と」

明朝、まだ日の昇りきらない朝靄に濡れた渓谷を造る渺々（びょうびょう）たる大河を悠々と横断している一行があつた。

轟々と激流の流れる大河ではあるがやはりその構造から流れが緩やかになる箇所は幾許かはどうしても存在しているのだ。その内、それまた比較的浅い箇所を横断決行の場所と決意したのが昨日の晩、とこうよりはかは今日の丑三つ時。未だ疲れが見え隠れしている団員達もいるがニコスの言つた通りもう形振り構つていてる場合ではない事は彼らも重々承知していた。だからこそ文句の一つも垂れずに黙々とされど漸進的に進んでいた。

「大分日が昇つてしまひましたな。キシリシア団長」

「嗚呼、ここの遅さは決してかならないものなのか？」

「ソロイまで従軍してきた疲労もありますし、如何に流れが緩やかだと言つても、足を掬われれば一巻の終わりになるやもしれぬのですから慎重にもなりますよ」

「むう」

「まあ、そう唸らんで下さい。直に涉り切りますから。もう少しの辛抱です」

デニースの言つた通り、直に一边倒の団員は全て向こう岸に移動が完了し残るはキシリア、デニース、ニコスの三人となつた。
先達て、デニースがゆっくりと水に沈み行く。

背が他の者より低いらしく頭一つ出ぬ出ないのギョギョの所で息苦しそうに進む。

そして、無事に涉り切った。

「大丈夫です！途中、突然現れる段差がありますので注意しながら御涉り下さい！」

次に渉るのはキシリア。

錘になる武具の類は既に向こう岸に渉っており、その身には護身用の短刀と帷子のみを纏っていた。

「結構流れが速いのだな、気を抜いたら流されそうだ。これは前言撤回する必要があるな……」

デニスよりかは背が高いので息苦しいといふことは無かつたが、予想以上に川の流れが強く思うように動けなかつた。

「もう少しで段差がありますので、お気をつけでええ」

号が飛ぶ。

氣恥ずかしくなり、キシリアもそれに返すように叫んだ。

「分かつてゐる！一々心配しなくてもいい！私は大丈夫だから

「――」

そう思つていた。

「何ッ――！」

そう、デニースが言つていた段差に差し掛かつたのだ。

両足を同時に。

そして、そのもつ片方の足を『何か』に引き寄せられていた。

「ぐう、がああああああああー、ゴホッゴボッ！―」

気道に水が浸入し思つた通りに呼吸が出来ない。
幾ら抵抗してもけつして足に絡みついた『何か』は離れない。
段々と意識が遠退していく。

水に浮く、心地いい感覚。

まるで赤子が羊水に包まれ育つ様な。

水中から見る陽光の差し込むその佳景を最後に。

意識は途絶えた。

網のように生い茂り蔓延る樹枝を足場とし、軽快に跳躍する一つの影があった。

猿のようで猿ではない。

慣れた手つきで木々になる果実を巻り取り口に含みながら渓谷に流れれる河川を手指している。

男は毎日の食料の確保の為に遠く離れた河川を往復することを新たに日課としていた。

竜、フェルニゲシュは必要最低限の活力を与えただけであつて何も世話をすることは言つていらない。

始めは男もフェルニゲシュに頼らうとしたのだが、頑なに拒否する姿を見て漸々自給自足の生活へと発展させた。

今ではそれも板についており、痩せ細っていた身体も筋肉が付き随分と逞しくなつていた。

「んはあーーはあはあああああ。ふん、ふんふー」

忌々しいあの偉丈夫が鼻歌として奏でていた何か。だが、それも慣れれば一つの娯楽として受け入れていた。

ある意味、この男は図太い神経と胆力を有しているのかもしれない。

「ひやつぼう」

長く伸びた蔓を器用に使い、華麗に回転しながら見事な着地に成功した。

自身も満足がいったらしく満面の笑みだ。

「今日は何が捕れるのかあ～」

自作した籠を腰に提げ、ゆつたりと川に近づく。
何時もは何の変哲も無いただの水面。

それがどうだろう。

目の前には何か得体の知れない物が流れていった。

「め、珍しい?！」

恐怖もあったがどうやら好奇心が打ち勝つてしまつたようだ。
恐る恐る川の中へと身体を沈めそれを掴んだ。

「お、重い……これ」

「一体何なんだ、これ？」

ズルズルと引き摺りながら水中から陸へとそれを上げ、木の枝で突いている。

「フェルニゲシュにでも聞けば分かりそうかな？」

やうやくとそれを肩に担ぎ、再び軽々と枝々の間を跳んで行った。

「おおおおうう、おおおおうう。キシリ亞様あああ……。」

渓谷に轟音らしい叫び声が反響したの言つまでもない。

第一章添記「予期せぬ邂逅」（後書き）

一万アクセス突破致しました！

本当に有難うござります！！

感謝感激です！！！

展開ですが、何かありきたりなような気もしないでもないような……

まあ大丈夫だよね！？

次話ではついに主人公とキシリシアが！

あ、あと感想受付を誰でも出来るようにしました。

今後もよろしくお願ひ致します。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりサンバを踊りだします。

第一章 暫記「赤面」

田を覚ますとそこには小屋だった。

黴臭い。

幽暗な其処は、色彩というものが無く緑一色。

そんな部屋の中に不恰好な木の寝台が一つ。

その上に擦り切れた外套が敷物代わりに敷いてあるだけだった。

「ん、起きてたのか」

小屋の扉らしき部位を開け、淡い光を纏いながら侵入してきたのは一人の男。

その体躯は筋肉質でよく鍛え上げられているものだった。

肌の色は褐色に近く小麦色の肌と形容できる。

そしてなにより特筆する所は、

全裸だった。

「

ツ！――

キシリアの声にならない悲鳴が森に響く。

歩くたびに揺れる《それ》にどうしても目が行くのだ。
羞恥を感じていないのだろうがあまりにも無防備すぎて恥ずかしくなつてくる。

「何だ？ どうしたんだそんな顔して？」

キシリシアは熟した林檎の様に顔を赤らめ、柄に似合わず女々しくもじもじしていた。

第六大隊の団員が見れば絶句するか、一部のものは発狂しだらう。

「ぬ、う、あう、その、何か、何かで『それ』を隠して下さい……」

鳴り響く金切り声は男に容赦無い傷を負わせれるほどに大きいものだった。

大分堪えたらしく耳を両手で押さえながら覚束無い（おぼつかない）足取りでキシリシアに近づく。

「何で？」

普段、団員達の肉体を見慣れているものだから男性に対する羞恥心というものが多少薄れてはいたのだが、流石のキシリシアも『それ』には耐性は無かったようで、恥ずかしげも無く徐々に近づいてくる『それ』に赤面しながらも目が釘付けとなっている。

「う、うえ？！ 何でって言われても……その

明確な返答ができず自暴自棄に陥りそうになるキシリ亞。
言いたくとも言葉に出来ない事はあるもので、今がそれであると
彼女は回る頭で理解した。

「だから、何でわざわざ動きをとづ難くする格好をしなけりゃな
んないのつて？」

「や、それは、私が困るといつか、何といつか……」

「だから、何で？」

天然ほど怖いものは無い。

「困ると書いたら困るのです！ 女の前なのだから少しは恥を知り
なさこ……」

「……仕方が無いな」

男はやつと小屋を出て行き暫くすると《それ》の位置する部
分に大きな若葉を付け帰ってきた。

「これで文句は無い？」

「……はー」

未だ納得のいかなかつたキシリアだが、これ以上言つても全く譲歩しそうな気配が無いので不承不承、本題に入ることにした。

「その、田が覚めたばかりで状況が掴めないのですが質問を一、二させてもらつてもよろしいですか？」

「ん？ 鳴呼、問題ない」

「ではその、此処は一体何処ですか？ といつか何でこんな所に？」

理解できないと言つた風で、心底不思議そつな顔を晒してくる。

「川で流れてたんだ。珍しい物かと思つて引き上げたんだけど……まあ違つたらしい

残念だつたよと言わんばかりに首を振り落胆する様子を見せる男。

「珍しいって……」

この男は何か変だとキシリ亞は感じていた。

人の目の前に全裸で現れている時点でそれはもう分かっているのだが、人の事を馬鹿にしているというか同じものとして見ていないように思えるのだ。それはまるで動物や生い茂る木々を見つめるような眼差しだったり、同一の存在として見ているのではなくどちらかと言えば見下しているかのようだ。

「それと、此処は自分で造った家だ。まあ自分で造ったと言つてもフェルニゲシュに手伝つてもらつたんだけど。何でも自分でしなければいけないの、大変だね。ま、もう慣れたけど」

「手伝つてもらつたつて事は他にも?」

「そ、気が荒いっていうか人間嫌いだけ?」

男はそう言いながら首を上下左右に振つている。
首を振れば振るほど頭部から得体の知れないものが飛び出す。
だれもが不潔だ、と嫌悪感が沸くだろう。

「あの、助けてもらつて」「いつのはなんですが……臭いです」

先是気が動転していて氣付くことが出来なかつたが、この男、身体のあちこちに汚れが見られ腐臭が漂つてゐる。さらに頭を振るもだから臭いも再び鼻孔に吸い込まれていく。

意識しはじめるともうじつよつもなかつた。

「いつも大隊では氣になりませんが我慢出来ません！－！　即刻、洗淨！」

木の寝台から勢い良く起き上がり、怪我人とは思えない速さで男の手をとり半ば強引に外へと連れ出した。

河への道が分からず森の中を迷う羽田になつたのは内緒。

第一章捌記「赤面」（後書き）

キシリアは極度の緊張や不測の事態が起きた場合は素の女言葉に戻ります。普段軍内部で使用している言葉は意識下の元で捻り出されているのです。

まあそんな事は置いといて、何と！ 初めての感想を頂きましたー！ 純粹に嬉しいです。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりサルサを踊りだします。

今後ともよろしくお願いします。
更新遅れた……

第一章 玖記「忘却と願望」

美しい情景の表現の仕方といつのは様々である。奥深さがあり、それに同居するように壮大さや優雅さを際立たせているものだ。

だが、今、目前にある「これはどうだらう。

素朴で簡素で何の変哲も無い森林。

されどもどこか懐かしい、望郷の念にかられるのだ。

木々の間をまるで生き物の如く枝葉を震わせながら流れ行く風。後ろ髪を靡^{なび}かせながらこの野趣にあふれ風趣にとんだ景色を眺める女が一人。

「此處は……」

頬に伝づ零も何故そこにあるのか、キシリシアには分からぬ。悲しくもない、嬉しくもない、悔しくもない。

ただ、空虚な思いを馳せる。

「不思議なところだらう? 此處は」

「此處に来ると嫌なことを忘れることが出来るんだ」

「思ひ出すのは一瞬。それでも苦しいものは苦しい。そんな記憶な
りこりないかい」

「此処に来れば嫌な」と思い出す。だけどもそれも一瞬のこと

「数瞬の後には何も覚えていない」

「何故自分は涙しているのか、何故自分はこんな気持ちなのか

「分からなくなる」

「でも、気にはしない方が良い」

「それはそれで幸せなのだから」

男は語る。

強引に引き摺られてきた所為だらつ。

男の股間にあるべき青々とした若葉が舞つてしまっていた。

「そんな状態で言われても何もいみ上げできません」

そうキシリシアは微笑しながら吐き捨てる再び何事もなかつたよう歩き出す。

歩き出した方向とは逆の方へと進んだ男はそこらへんに自生していた何かの樹木の葉を彂り取り悠長に股間へと巻いていた。

さりに森の奥へと突き進むキシリシアだが、唐突にその歩みを止める。

男は不思議に思い傍に駆け寄るとその理由を把握した。

「まだ泣いているんだね」

そう言った男はキシリシアに向ける表情を柔らかいものへと変える。キシリシアの頬には絶えず零が零れ落ちていた。

頬を伝い顎に溜り大粒の水滴となり落下するその様は傍から見れば男泣きをしているようにしか見えないだろう。

だが、彼女の脳裏には様々な思い出が蘇りそして消えることを繰り返している。

耐え難い苦しみが波のように押し寄せてくる筈だ。何が悲しいのか何に悲しいのか明確に分からぬままに涙は零れ落ちる。

それを止める術は無い。

追想、追憶、追懐。

彼女が否定したい過去が消え去るまで忘却は止まらない。

「理解できない。訳が分かりません」

「頭が朦朧としてすゞく気分が悪いです」

「でも、何故か心地いい。爽やかな、清々しい気分にもなります」

「何で、こんなことを見ず知らずの貴方に吐露していくのでしょうか
か」

「普通なら在りえないです」

「よく分からなくなつてきました」

キシリヤには此の場所は薬であつて毒にも等しい。
あまりにも多いのだ。

それは彼女が悲惨な人生を送つてきたからなのか。

人には幸せと感じられる生き方を自身で否定し己を虐げているのか。

それは、本人にも未だ理解できない。

「行ひづ。このまま此処については駄目になる」

ゆつくりと青白くか細い手をとる。

汚れていても力強く大きくなつた手が小さく纖細な手をそつと包む。

男は今まで進んでいた方向の逆へと引っ張ろうと腕に力を込めた。

「それに、河はあつちだしね」

男がキシリシアに向けた恥じらいが無く屈託の無い笑顔は、彼が初めてみせた感情の表現だった。

広大な砂漠の中に孤立した楽園。

オアシスと言つてもいい。

そこは動植物が生活できる唯一の場所。

人の踏み入れたことのない場所は総じて神秘的で莊厳な景色であ

る。

では、美しくない景色はどうなのかと言えばそうでもない。美しいかどうかなんて人それぞれと言ってしまえば元も子もないが事実ではある。

少なくともキシリシアは産まれてこの方目にしたことの無い光景に感銘を受けていた。

「凄い……」

轟々と流れ落ちる滝に感嘆の声を上げるキシリシア。河とは違う、また違った迫力を感じていた。

「あの水が流れ落ちている真下に行けば身体の汚れを落とせる。痛いから嫌いだけど」

男が指した場所は水流が止め処なく降り注ぐ場所。そんな所に裸で行けば痛いのは当たり前である。

「じゃ、行きましょっ」

嫌だ、と首を横に振りながら立っている場所から動こうとしない男を無理矢理に滝壺へと押して行く。

水は冷たかったが一度入つてしまえば時間と共に慣れていき流れを感じるだけとなっていた。

未だに嫌だと踵を返そつとしている男。

「ええい、まじめつこしい」

キシリシアは埒が明かないと、堪え切れずに男の身体をガツチリと掴み持ち上げる。

何事かという風な顔をした男が豪快に投げ飛ばされる様はそれはそれは面白いものだらう。

結局は強制的に水の中へと沈められたこととなつた。

「痛えええ痛えよーー！」

身体に打ちつけられる水滴が与える痛みに悶えながらもその場に留まる男。

口では嫌だとは言つてはいるが徐々に身体が痛みに慣れってきたのだらう。

その証拠に少し後からは文句一つ言わず懸命に身体を撫で、キシリシアと会話をしていたのだから。

「此処は、この渓谷は先ほどの様な不可思議な場所がまだ存在しているのでしょうか。興味が出てきました。のような所が他に在る

のかと思つと興奮します。」

「 もあ？ 在るといふれば在るだらう、無いと思えば無いだらうへ。」

「 デリケートですか？」

「 思えばそれは現実になる。フエルニゲシュに教えてもらつたんだ。
見ようとしていないならそれは永遠に見えない、見ようとう固い
決意を持つていれば何れは見えるときが来るだらう。見えないとい
うことはそれは本氣で見ようとしていなかからかその時ではないか
らうて。」

男は恥ずかしそうに頭を搔きながらも続けていつの言つた。

「 よく分かんなかつたからデリケートとか聞いてみたんだけど、フ
エルニゲシュ曰く根詰めで行動を起こせば大抵は成就するんだつて
ことらしこ」

「 それとあの場所のよつな所が他に在るのかと云ふことと何の関係
が？」

「 ん~。そんなに不思議な場所が見たいなら、頑張つて探せばとい
う」とを言つたかった

「はあ……」

「まあでも、見たことの無い、御加晰や伝承・神話みたいに語り継がれている世界は存在していると自分では思つんだ」

「此処から外の世界は何でも新しいしそれは想像や空想のものより何倍にも綺麗だけど、白昼夢に出でくるような不可思議な世界も楽しそうだとは思わない?」

「それに、そんな世界になればさつきの様な所が沢山在かもしけないじゃないか」

終始笑顔で語る男はまるで無邪氣な子供。

恥ずかしげもなくそんな事を言つ男にキシリアは苦笑しながらも温かい眼差しを送つていた。

「そうですね。そんな世界があれば私の望んだことも少しはやり易くなるんでしょうね」

轟々と鳴動する滝は汚れと共に何かを洗い流すように絶えず流れ落ちていた。

第一章 玖記「忘却と願望」（後書き）

書いててよく分からなくなつた。

次回には遂に第六大隊とフルーティゲシュ、そして一人との邂逅です。
どうなることやら。（一回目）

ちなみに今回はキシリ亞の願望と主人公の思いがちらりと出てきました。

いつか詳しく書きたいなあ……。

あと、嫌な事を忘れると言つても一時的なもので、ふとした瞬間思
い出します。それは凄く苦しいこと。そしてまた忘れたくなる。そ
んな感じのことを探っていました。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりルンバを踊りだ
します。

第一章拾記「竜 咆哮 そして邂逅 自明するは男の天分」（前書き）

お気に入り登録数百件突破！

地べたを転げ回りながら悶え喜んでおります。
嬉しいです。今にでも昇天しそうです。

ありがとうございます！！

えー、序でに。キシリ亞の口調も安定しなくなつて参りました。
推敲したいです。

第一章 拾記「竜 咆哮 そして邂逅 自明するは男の天分」

絶望

絶望とは希望の無い様子を示す。

社会的地位の喪失。

信頼すべき相手の喪失。

裏切りなどに遭遇し、未来への希望を失ったときは絶望に陥る。

戦争などの極限状態では絶望が起こりやすい。

平時でも辛い経験に遭遇し、絶望することがあるだらう。

絶望している際は、ひどい孤独感

世界から孤立し社会的に見捨てられたような感覚に襲われる。

そう。

今

田の前には

絶望がある。

テニスには目前にある存在を許容することは甚だ難しいことだった。

この世界は悪と悲惨に満ちたものだという人生観。
世界は盲目的な意志によつて動かされているとする思想。

そんな悲觀主義的思考が止むことは無い。

眼前にあるのは御伽噺や童話の中で語られてきた架空上の存在。
伝説の勇者がそれを倒し、皆を助ける。
そんな物語は子供の頃からずつと憧れてきたお話の一つ。

火を吐いて、民に悪さをし、王を困らせる。

王は国の中で強い者を討伐に向わせたり、率先して討伐に行つたり、そんな夢のある話。

幾千のお話がある中で

といつ存在は

孤高で
崇高で
至高である。

滋味に富む、滋味を物語に訛る、
むびょう無謬の香辛料。

そんな存在。

倒せば英雄。

そんな欲望もよぎる。

それでも、そんな感情を持てたのは刹那の間にしか過ぎず、睨ま
れれば蛙のように縮こまるしかなかつた。

『何事かと来てみれば……鬱陶しいな』

竜は口を開き咳く。

されど、それは、目の前の人間達には、ただの音。

『ふむ、奴は無事か?』

フェルニゲシュの言つ奴とは諂ひらずとも分かること。

『ふ、何にせよ此処に人間が立ち入るのを見逃す訳にはいかん』

漆黒の竜は咆哮する。

轟く咆哮は雷鳴の如く大地を揺らす。
幾度も咆哮をし、突然翼を広げ、そして大空へと飛翔する。

『齧して追い返してやるつか……』

咳きは音となり風に運ばれ目前の人間の耳へと入る。

竜の言葉を耳にした人は戦々兢々（せんせんきょうきょう）とした表情を見せた。

それは、竜にとって悲しく、寂しく、そして醜いものでもあった。

巨大な体躯を羽ばたかせ大空を疾駆する化け物。
流動たるその躍動は人の踏み入れる領域ではない。

ある一部に線引きがされているかのようにそのある部分から先
へと行くことが出来ないのだ。
否、出来ないのでない。しないのだ。

踏み入れば、死。

そんな予感が頭をよぎる。

それは竜に臆する心情がまるで絡みつくが如く足を留めさせてい
る要因であるように、自身から発せられる恐怖の体現でもある。

それでも、それでもデニスは動かなければいけなかつた。

忠義に富み、信教を絶対とするこの男は、自身の忠義に値すると認めた軍の長を探し出すために奔走しなければならなかつた。

信教の命に背いてでも。

それは此処にいる人間全員に言える事。

厳格で峻厳ではある彼女を知っている者全てが口を揃えてこいつ言うだろ、う。

優しい御方だと。

「臆するなー！ 我々は誇り高き騎士であるぞー！ これしきの事でへこたれではならんー！」

鼓舞し、鼓吹する。

奮起した人は怒涛の進撃を始める。

駆ける足音と士気を高めるその怒声は竜の咆哮にも勝る。

「我等が長とするのは誰だー！ その御方を見捨てるのかー！ 我等の一生の恩人である御方をー！」

怒声に混じり鼓舞する女の言葉はこの場にいる騎士達にとって掛け替えの無いもの。
恩を忘れない為の。

「あの方がいなければ我々はこの場、いや、この世に生きてはいません！」

彼女が自身の身を挺してでも守つた彼等。
今度は彼等が身を挺する番だ。
恩に報いる為にも。

「そんな御方を見捨てるなどは有り得る筈が無い！…！」

宣言ともとれるそんな言葉を残してニースは前方を見据える。
目と鼻の先にあるのは竜。
踏み入れてはならない線。

それを今、踏み越え薦進する。

「進軍せよーー！」

破竹の勢いで進む彼らの瞳には恐怖の色など映してはいない。

全裸で木々の間を舞う男の姿を見るキシリシアの顔はまさに菩薩と言つていい程に穏やかな顔である。

「流石に慣れてしまつものですね」

枝々に飛び移り器用に果実を探つているその所業は人間離れしているとキシリシアは思つた。

「こんな所に住んでいるから出来るのか？ などとつい口を滑りしてしまいそうになる。

ある意味侮辱していることにもなりかねないのだから言葉とは難しいものだ、と再度認識し何度も頷いていた時だった。

「あ

落ちた。

盛大に頭から。

呆然としていたキシリアだつたが直に我に返り、救出へと向う。

「大丈夫ですか！」

倒れている男の傍へと駆け寄り、丁寧に身体を起こす。

綺麗にした身体からは悪臭も発せられておらず、苦も無く介抱出来た。

介抱の途中、いくら見慣れているとはいってもちゃんと見たことが無い男の身体には目が行くもので気がついていないことを思ひして隅々まで凝視し始める。

「ふうむ、やはり私のような女と違つて随分とガッシリして」

肩の三角筋辺りから、腕の上腕一頭筋など次第に下へと下がつてくる。

眺めるだけでは我慢が出来なくなつたのか、恐る恐る触り始めた。

「それでいてしなやかで良い身体をしているんですね」

遂には身体全体にまで及び始め、肩の後ろの部分にある僧帽筋から始まり前述した三角筋、上腕二頭筋に加え大胸筋や腹直筋、大殿筋、そして大腿筋など、全身くまなく撫で回したと言つて過言ではないだろ？

触り終え、頬を上気させながらも気持ちを落ち着けるために息を吐いた。

「べ、別に、疲しい事なんぞ思つてもいないし、ただ興味があつたと書つだけですし。」

自分に言い聞かせるように咳きながら再び何度も何度も頷くキシリア。
そして一言呟いた。

「それにしても、何で女の私よりこじんな所でこんな生活を送っているこの男の方が肌が綺麗なんでしょうか……」

咳きは空しく響く。

「痛え……」

暫くして気がついたらしく、男は涙田になつながら頭をさすり起き上がつた。

「調子に乗つてあんな事するからです」

「いや、違う。何か聞こえたんだ……」

「？」

「喚く様な、そんな感じ」

男は先ほどとは打つて変わつて神妙な顔つきをする。
じつやう彼には聞き慣れない何かが聞こえたらしい。

「どうあるべですか？」

身体を洗つたら直にあの小屋に帰るとこつ手箋になつていた。

そこに、異変が起つた。

なりば、どうするといつ」とある。

危険なのが分からぬまま近づくのもあまり薦められるものでは無いので、相談しようとした暗に持ちかけたのだが……

「よし、行こう。」

「は？」

「ほり、行くよ？ 早くしないと！」

「こいつは一体何を言っているのだ？」と言いたげな表情で睨むキリシアだったが力強く引っ張られ小さな抵抗も空しく空回りで終わってしまった。

大木の様に太く剣先の様に鋭い尾を叩きつけ、騎士達を薙ぎ倒す。巨大な大顎の威力は凄まじく、地面に埋まっていた岩石をも噛み砕く。

鋭く曲がった大爪は騎士達の肉体を易々と引き裂いた。

「怯むなあああ！！ 進軍を続けれろ！！ 相手も徐々に疲れ始めている筈だ！！」

フェルニゲシュは苦い顔をしていた。

目の前にいる人間達を傷つけようとは思つていなかつた。
尻尾を大きく振るつた弾みで前衛を担う人間の一団を難いでしまつたのだ。

巨木をも倒す破壊力を持つた蛮力を振るわれた人間達は激昂し、抵抗を強める。

抵抗を強めた人間達は槍や斧を手に取り目の前にある獲物を屠ろうと力を行使する。
なし崩しに応戦しなければいけなくなつてしまつたのだ。

「進め！！ 怯むな！！ 瞽するな！！ 我等にはあの方が必要なのだ！！」

馬鹿の一つ覚えの様に同じ様な事を幾度も喚き散らす。
だが、その鼓舞に応えんと騎士達の士気は上がり続ける。
それは、竜の咆哮をも焼き消すほどの大音声を張り上げるまでに大きな奔流を作り出した。

『嗚呼！ 鬱陶しい！！』

それでも、最上種である竜にとっては蟲の蠢きに値する程度のもの。

『焼き殺してやりたい！』

だが、怒りが頂点に達すれば幾ら温厚な者であろうと堪忍袋の緒が切れてしまうのはなにも人間だけではない。

そして、竜、フェルニゲシユにはその限界が訪れようとしていた。

竜の動きが静止し威圧的な眼光を送りながら大きく息を吸う。吸引された空気が巻き起こす豪風の風声は清く美しい音色。蛮声を上げていた人間達も呼応するかのように静まり返る。緋色の瞳を目標を定める為に写る情景の細部まで眺める。そして、一拍の後。

漆黒の大顎を盛大に広げ、火球を放った。

その火球は流星の如く騎士達に着弾し、弾け、砕け、爆ぜ、そして業火が全てを焼き尽くす。

直撃した騎士達はその形を留めぬまま、消し飛んだ。

「ああ、ああああ、あああああああ」

直撃を間逃れた騎士ですら肉が爛れ、呼吸が出来ず、苦しみながら息絶える。

爛れた肉を引き摺り、激痛に大地をのた打ち回るその情景は地獄絵図と化した。

「なんごつことだ……」

デニスは言葉を失っていた。

自分の指揮で仲間を率い、そして死なせた。

先導する者としては当たり前のこと。

だが、デニスは今まで一度も人を率いたことが無かつた。

この、法王庁直属第六大隊に就く前にも傭兵紛いとして戦に出でいた事がある。

そう、第六大隊の唯一の戦の経験者なのである。

それでも、尖兵としてや歩兵として出撃したに過ぎない。軍の先頭にて、何度も生き残ったその手腕は賞賛に値するが、所詮は唯の雑兵である。

大群を率いて駒の様に扱う。

そんな冷徹で重厚な心など持ち合わせている筈が無かつた。

「おお、おおお、おおおおおおーー！」

単身、特攻した。

「今向おひとしている場所で何が起こっているのか分かるのですか？」

そう確信した。

人が起ころうとしている。

人には聞き覚えのある声が幾つもあった。

それは、まるで竜の咆哮のような地表を揺るがす巨なる爆音。それに続いて轟く人の胸間声。

男が向う方向に共に駆け、目的の場所へと近づけば近づく度に声が、音が、大きくなる。

それがどうだらう。

男はそう言つた。キシリ亞にはそんな声や音など聞こえなかつた。聞こえていなかつた。

喚く様な

男はそう言つた。

遙か前方を疾走する男に向つて大声で問う。

「詳しい事は分からぬ！　でも、フェルニゲシュに何かあつたの
かもしけない」

男の口から出た言葉には聞き覚えがある。

フェルニゲシュ

もう一人いふと考へられるこの男の仲間。
だが、何故今この時にそいつが関係あるのかと疑問に思った。

「其処に貴方の知り合いがいる可能性があるのですか？」

今、この男が向おうとしている、何かが起つてゐる地点に仲間
がいるのかと言つ問い合わせ。

其処に本当に仲間がいるのならば確かに急がなければならぬ。
だが、其処にはキシリヤの仲間もいるのかもしけないのだ。

「嗚呼、可能性じゃない。絶対にいる」

何に確信を得たのかは知る由も無いがその仲間を心配しているのはその表情から知ることが出来た。

「そうですか。実は私の仲間も其処にいるかもしません」

「そう。だつたらもうちょっと急げ」

キシリアは驚愕していた。

遥か前方にいたはずの男が何時の間にか目前へと移動していたのだ。
そして、束の間の浮遊感の後自分が抱えられていることに気づいた。

「ちよ、ちよっとー 何するんですか!」

所謂、お姫様抱っこ。ではなく唯の抱っこである。
鼻先には男の顔があり息が掛かる。

恥ずかしい事この上なかった。

「抱えた方が早い」

男は、そう吐き捨てると先程の数倍の速さで木々の間を駆け、小川を飛び越える。

過ぎ去つていぐ景色の中でキシリ亞は懸命に男の身体にしがみついていた。

物凄い振動がキシリ亞の身体を今にでも落とさせようと迫つてくれるのだ。

恥じている場合ではなかつた。

「見えた！――！」

森を抜ける。

森の中とは比べ物にならない量の光が目を焼いた。

だが、其処にあるべき情景は信じられないものだった。

大地には、黒ずみ煤と化した人の形をした何かが。その先には血を流しながら死に物狂いで剣を振るう騎士達の姿。更にその前方には在るべき筈の無い存在。

竜

「フェルニゲシュー！」

今、自分を抱えているこの男は何に向つて声を放つた？

キシリアは愕然し絶句した。

この男の仲間とはあの化け物のことか？

この男は化け物の仲間？

あの化け物は一体？

疑問と不審。

嫌悪と忌避。

悪辣な思いが意思に反して込み上げる。

今直ぐにでも男から離れたかった。

「は、離せー！ 今直ぐ離せえええーー！」

狂気が身を包み、身体を操る。
支えられていた腕を跳ね除け、地面に降り、そして駆けた。
仲間の下へ。

「？！」

男はキシリ亞の豹変に驚倒していた。

否

納得していた。

哀れむ様な、わびしむ様な。
見下しているともとれる表情。

それは、キシリ亞に見せた笑顔とは真逆。

「ああ、やうか。やつぱり人間ってあんな風なのか……」

落胆と哀愁と嫌悪を漂わせながら恐怖の表情を晒しながら自分が
離れていくキシリ亞を眺めて、溢した。

「フェルニゲシユが言つた通りじゃないか」

「何だ……期待するんじやなかつた」

明確な拒絶を示された空しさと、自分があんな【もの】と同等だと
言つ嫌悪が男の心を同時に襲つ。

今、その人間と戦つてゐる自身の友とも呼べる存在。

フェルニゲシユの下へと歩み寄る。

そして叫んだ。

「うあああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああ

それは、竜の咆哮も、轟く大音声も、大地を流れる落ちる大流も、凌駕する。

声。

音色。

歌。

神々しく、禍々しい。

感情が溢れ、膨れ、また溢れ。

視認できる暗黒の光条の奔流が辺り一帯を竜巻の様に回転しながら包み込んだ。

『何が起じつた?』

音を無くした世界に再び音がやつて來た。
再び漆黒の竜が沈黙を打ち破つたのだ。

黒い光が晴れ、確認はしたが周りには何の変化も無かつた。

否

変化はあつた。

それは

「竜、が……喋……つた?」

愕然とした肉声は誰ともなく発せられたものだった。

第一章拾記「竜 咆哮 そして邂逅 自明するは男の天分」（後書き）

何だこの展開は？！ と直感になつておりますがご了承下さい。当初、主人公の天分の顯現の描写を長々と書いていたのですが消し飛びまして、大分短くなつてしましました。申し訳ない。閲覧者様の想像力に頼ることにします

えー所変わつて、説明。

竜は現在その生息域を狭めています。

現在の人間の中で竜を見たことがある者はほほいません
フェルニゲシュに突き刺さる武器類は昔の物なのです。たぶん。
そして大隊はキシリ亞にぞつこんといつか、彼女を根幹としています。

彼等には彼女がいないと駄目なのです。たぶん。いろんな意味で。

この世界では 現時点での 魔法の類の能力は出てきません。
たぶん。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりタンゴを踊りだします。

第一章拾壹記「帰還」（前書き）

場面が変わります。」注意下せん
スミマセン。

あと、地名とか国名とか、キャラ名とかには深くついてないでね
!!

ネーミングセンスとか欠片も持っていないのですから。
まあ、そこは『愛嬌』ということに……

神

神の名前、名称世界各地で、人類が知能、文化を持つと同時にもつたであろう概念であり信仰。一神教、多神教などの違いはあるが、なんらかの「神」「神聖な存在」への信仰、概念は多くの人々が持っている。

それは誰かが否定できる事でもない。

歴史的には自然崇拜や精霊、祖靈崇拜などから始まり、やがて都市文明や国家制度などができると神殿や神像、聖職者などが制度的に整えられた。また口承で伝えられた神話などが聖典として文書化されるようになる。

信仰されている民族宗教や、記録に残る古代宗教など数多くの神、神的精霊、概念が存在している。

無神論を唱える人々、無宗教という人々もいるが、「運」の良し悪しや哲学的概念、ジンクス的なものを完全に排除できるわけではなく、また論理や科学的概念ですべてに必然性をもとめれば、「科学」の神化、科学信仰ともいえる。

なんらかの概念をよりどころにするといひて神的概念があり、信仰がある。

それは人間の思考と切り離すことは難しいだらう。

信仰、宗教というものはいつの時代でも人々の支えや心の拠り所であつたりと、様々な点で人間とは切つても切れない関係にある。だが、其れが原因で起こる紛争や戦争というのも必ず存在している。

物欲や慢心、信頼や信用ではなく、依存。

戦争と宗教というものは人間の醜き本性を体現しているのかもしない。

クロニウス

正式な名称はクロニウス神国。

寒流と暖流がぶつかる独特な地形を有しているクロニウスの海に周囲を囲まれている島国である。

が、その領土の広大さは周辺諸国の比ではない。

広大な大陸を一つ、そのまま領有していることと同義。

国民総数は数千万を超え、名実共に超大国の一員であることが証明された。

内陸部に位置する国では知り得る事の無い海洋の恐怖や、この地域にのみ頻繁に発生する地響きに悩まされながらも民は懸命に生きている。

その支えとして、ある時期に爆発的に広まった、この国を代表する、この国の根幹でもあるもの。

宗教。

明確な名称や肩書きなどは持ち合わせていないが民からは、

セズ教と呼称されている。

呼称の由縁は幾説も提唱されてはいるが、最も支持を得ているのは誰が言い出したのか分かっていない俗説であり、なんでも、開祖の実名だ、神から承った戒名だと言うもので、自称知識人達が日夜両説について議論しているとかどうとか……。

尤も、正規の（法王庁に登録されているという意味合い）聖職者達は現法王のミドルネームである『テュレ』からとつてテュレ教と呼んでいる。これは現法王、基、法王庁も公認していることであり周辺諸国ではクロニウス神国のことを『テュレ』と省略・簡略化して呼称することも多い。

国の主君の位に位置する、統治者は言うまでも無く法王である。が、実際の統治をしているのは法王庁の総責任者である枢機卿だ。要するに共和制、共和主義なんでものの正反対に位置する神權政治に近いものを主体とする国家なのだ。

だが、他の専制政治国家とは違ひ国民からの不満はそれほど見られない。

貴族制、貴族主義を掲げる国特有の身分差別や侮蔑意識がそれほどまでに蔓延っていないといふことがその要因の一につながっていると考えられている。

故に民衆は、島（大陸といつても過言ではない）の開拓事業等に

は協力的で広大な土地の彼方此方に村が造られ、それを基盤として大きな都市が出来上がった。

そんな幾つも点在している都市の中で、最も大きく、そして広大な都市であるこの国の首都ラパスでは、現在、街中が仰々しい飾り付けで覆われ何かが行われようとしている。

「あの、一つお尋ねしてもよろしいですか？」

街路を忙せわしく往復している住人に遠い町から遙々とやって来た唯の放浪者が、街の現状に疑問を呈していた。

「一体何が行われようとしているんですか？」

「ああ、つ？俺は今忙しいんだ！　おめえに付き合つてる暇なんざ無いってことが見て分からんのか！」

放浪者は手酷くあしらわれた事に膝を折りそうになるが、次があると楽天的に捉え、めげる事無く挑戦する。

「あのーすいません」

「あん？　あー、後々」

新たに捉まえた住人に再度疑問を呈したのだが、一瞥しそして呆れられ結局は峻拒される。

「あ、あのー」

「？」

「お尋ねしたい事が……」

「……知らん」

「今、明らかに顔を見て判別したでしょ！？」

冷た過ぎる眼差しに耐えながら、住人達を追いかけるように何度も街中を往復していた。

幾度と無く突貫した放浪者だったが、親切に現状について享受を垂れてくれる人が見つかったのは両手の指では数え切れない人数になつてからだつた。

「今、この街では先祖の靈を慰める祭祀が行われているんだ。他国では厳かに沈痛な面持ちで、黙祷なんて行為をする所もあるらしいが、うちには違っていてね、なんていうか、こう、もっとパーティーとやろうぜ！みたいな気質の人が多いんだよ。私もこの国に移住してきて驚いたが、そう悪いもんでもないよ。辛気臭くなるのも嫌だしちょつといいわ」

おっさんが移住してきた他国人だったという本当にどうでもいい情報と共にこの街で何が行われようとしているのかを知った放浪者だつたが、自身の目的の為にも、どうしても知りたいことがあった。

「あの、もう一つお尋ねしてもいいですか？」

「あ、ああ。問題無いよ」

突然真面目な顔付きに豹変した放浪者に多少辟易しながらも懇切丁寧な受け答えをしてくれるおっさんは、聖人君子と言つてもいいのではないだろうか。

「ついこの間、この首都から出立した第六大隊が近日帰還するとの噂を耳にしたのですが……」

「ん？ 第六大隊？ ん？…………ああ！ あの役立たず

共かい「

善良なおつさんから出てきた言葉は、あの隊と只ならぬ（・・・・・）関係を持っている放浪者にては信じ難いものだつた。

「え、ええ」

だが、一々反論していくても埒が明かない。というより、田の前にいる親切なおつさんはこの放浪者が隊に『』しているなんて事は知る由も無いので致し方ないことではある。

なんとか苦言を飲み込みながらも曖昧な相槌を打つ。

「いやあ、あの能無し共が法王様の勅命を承つたと聞いた時には天地が引つ繰り返るかと思ったもんだよ。後から聞いた話によるとお役人様も渋々了承したってらしいじゃないかい。大丈夫なのかねえと思つてたんだよ！ それがどうだい？ 何でも無事勅命を全うしちゃうだ！ これで誰も無能隊などとは言えなくなつたなあと感慨深くも思つてたんだが

「

次第に唯の愚痴や世間話に転化していき耳が痛くなつてくる。早々に次の話題へと移ろいつと催促の為にわざとらしく咳き込む。

「ゴホンッ！ ッゴホッゴホッ……ウッ……オエッ」

「おいおい、大丈夫かよ」

「……死ぬかと思った」

手違いで大きく吸引しそぎた為、気管に異物が入り込んでしまったようだ。

だが、おっさんの無駄話を中断することが出来たので面田躍如というところか。

「えー、気を取り直して。その第六大隊の帰還する日付などは耳にしていますか？」

これこそが放浪者の真意。

「あーっと、何時だったかな？…………そうそう！　今日だよ今日！　祭祀の日と重なるなんて、なんと言つ幸運！　そいつらの帰還も相まって今年の祭祀は盛大なものになるだろうなあ！－」

上機嫌に去つていったおっさんを後にして、放浪者は都市の中心部に位置する大広場へと足を進めた。

首都ラパスには法王庁の本部であることを象徴する旗印が掲げら

れた建物が幾つも存在している。

彩り豊かな煉瓦調の建物や豪華な装飾が施された塔等をイメージしがちだが、実際はそうではなく木造で彩の『い』の字も無い、茶一色のなんとも質素な空間である。（勿論、聖職者達の住まいは別である）

だが、建造物に法王庁の紋様が焼印のように象られ外壁の一部と化している情景を見るに、この街がセズ教（テュレ教）の総本山であることを表している。

そんな街の中心部となれば、そこにある建造物は旗印一色に染め上げられていつといふのは当然のことなのかもしれないが。

本来、正規に登録された聖職者達か、其れ相応の地位や権力を持つた人物で無ければ足を踏み入れることなど出来ない筈の場所に日々と侵入出来たのは、現在行われている祭祀の影響だろう。

毎年なんらかの行事がある度に一般開放されているのだが、そんなことを知っている筈の無い放浪者はけげんな表情で周りを見回していった。

（おかしいなあ？ 警備とかもつと厳重だつて聞いてたんだけど…

…）

決して口には出さないが、表情には出てしまつてゐる為、何故中央広場が開放されているのかという事情を知つてゐる民衆からは白い目で見られている。

そんな風に見られているなどとは夢にも思つていないのでから、不可思議な目線に対し、けげんな表情を深めていった。

太陽が頭上に昇りきつた頃、街中から独特な音色を放つ笛の音が響く。

その音色は何処か懐かしいものであつたり、沈み込んだ気分を陽気にしてくれる様な、今にでも踊りだしたくなる。そんな温かい音色。

民衆のはしゃぎ様は凄まじいもので、何処へ行つても公道の脇には、伝統的な衣装で着飾り調子良く笛を吹き鳴らしている光景がある。

酷い所では道のど真ん中に出しゃばって来て、踊り始める始末。お世辞にも綺麗とは言い難い舞踊や音楽だが、これが市井の人々の楽しみ方だと樂観的に受け止める権力者達。

様々な構図が生まれ、許容する。許容できる雰囲気が都市全体に広がっていた。

そんな中、街の出入り口でもある正門を潜る異様な一団が現れる。

正門を潜る者を監視し、門を守護する役割を担っている衛兵達は言葉を失っていた。

第六大隊の帰還は随分と前から噂されていた為、何時かはこの門を通るだろうと予見はしていた。

だが、目前を通り過ぎてゆく一団は衛兵達の想像を遥かに超えた様相で帰還を成しているのだ。

衛兵達は彼等、第六大隊がどう呼称されているのかを知っている。お坊ちゃま軍団、役立たず、能無し。

確かに一度も正式な戦に発つたことも無い、貴族の子息達を貶す意味も持つてゐるだろう。

衛兵達も少なからず、この隊を罵倒したことがあった。
だが、それは真意からではなく、仕事の癪癪や焦躁をぶつけただけである。

鬱憤晴らし、とも言い換えられる。

心から憎い訳でもなく、心から疎んでいる訳でもない。
だからこそ、法王の勅命を全うしたという報告を耳にした時には素直に感心していた。

素直に祝福しようと思つていた。

それが、どうだらうか。

眼前に映る異様な一団を見て、縮こまつてしまつてゐる。
祝福の言葉を、祝辞を、祝砲を、忘れ、固まつてゐる。
差し出そつとした腕を、手を、指を、まるで汚物にでも触りそつ
になつたと避ける様に引っ込める。

普通なら、常時なら、いつもない。

其の行いを見た者は衛兵達を罵つただらう。

誹謗しただらう。

痛罵を浴びせただらう。

冷罵を浴びせただらう。

漫罵を浴びせただらう。

嘲罵の的としただらう。

悪罵しただらう。

だが、今は、誰も、何も、言わない。
言えない。

帰還した騎士達は、幾分か数を減らしていた。
傷付き、疲労していた。

そして、服を、正装を、濡らしていた。

赤く、紅く、血塗られて。

表情は見えない。

ある者は衣服を裂いて顔に巻きつけ、ある者は仮面の様な者を被
つている。

覗き見えるのは眼光のみ。

それは酷く濁つていて、虚ろ。

騎士達全員が門を潜つただろつ。

衛兵達は閉門しようとした。

ふと、騎士達がやつて来た方向を一人の兵士が眺める。

「お、おい……あ、あれ、見ろよ」

一人の咳きに他の兵士が殺到し皆が一様に同じ方向を見つめる。
肉眼に捉えたのは大きな点。

否、点ではない。

それは、誰もが知つていて、誰もが恐れる、誰もが敬う絶対的存
在。

それが、まるで唯の大きな荷物の様に、荷車に繩で巻きつけられ
運ばれていた。

それは、眠つているかのように静かに瞳を閉じている。

その後方には、同じように荷車で運ばれる檻のような物が衣で
覆い同様に繩で固定されている。

檻からは動物の呻き声が絶えず鳴り響く。

唐突に烈風が凧ぐ。

檻を覆っていた衣が呆氣無く飛んでいった。

檻に捕らえられていたのは、人。

褐色の肌に伸びきつた白銀の髪。

その瞳は美しく妖艶に瞬く紫紺の彩。

そして全裸。

体中を鎖で固定され、身動き一つとれない状況。
鎖は手や足の拘束具に連結されている。

そして、その首には大きく、そして厳つい銀の首輪。

「

男の雄叫びは、竜の咆哮のように眺める人々を竦めさせた。

日射が反射し、白銀の髪と銀の首輪が同時に煌めぐ。

「なん、だ……あ、れ？」

当初の目的を完全に忘れ、祝い事に興じていた放浪者は、街の中を跋扈している異様に対し、順当な反応を見せた。

第一章拾壹記「帰還」（後書き）

えーと、フェルニゲシュと主人公とキシリア達の不可思議な場面はもつちよつと後に書きます。

どういうことが起こったのかは次話でちょびつとだけ説明？みたいのがあります。たぶん。

追記：

気づいたけど、初めて主人公の描写を書いたような……。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりタップ・ダンスを踊りだします。

第一章終記「報告……そして「（前書き）

一章が終了いたします。

放置している複線（？）はまあ、後々拾うとして、投げ槍感がいな
めないですがこんな感じで続きます。

第一章終記「報告……そして」

「なんだつてんだよ畜生……」

放浪者は愚痴を吐く。

愚痴と言つていいのかは分からぬが、苦言が漏れたのは確かである。

通り過ぎていった異様な一団に対しての、だ。

放浪者はある人物に会いに来ていた。

その人物を見かけたのだ、あの一団の中に。

其の人物が、他の騎士達と同様に虚ろな目をしていたのを見て、心苦しくなつた。

前に見たあの人はもつと希望を宿した瞳をしていた。
力強く煌く目をしていた。

後ろに引き連れている竜の存在も気になるが、兎に角何があつたのか一刻も早く、直接本人から聞き出したかった。

だが、放浪者の願いも空しく、中央広場の更に奥。本当に関係者しか立ち入ることの出来ない、法王庁の本部へと消えていった。

大きな荷物を連れて。

「さて、新任議決など以外にこの場所で議会を開いたのは初めてだよ。ま、そんな訳で我々を納得させる様な、詳しい話を聞きたいね」

キシリ亞が田の前にしているのは、実質この国の支配者である枢機卿。

見掛け、口調と共に仰々しくない「若き」の男は外見に反して
齢六十を超える妙齢だ。

本来は正装での出席が義務付けられている筈だが、此度は軽い格好での御出席である。

尋問が行われようとしているのこの場所は、誰しもが一度は田に
したことがあるであろう大審問場。

大審問場では聖職者の選任や国務長官の引継ぎ儀式、枢機卿の選任と不信任の決議などが総じて行われる。

議会が開かれる時には国内全土から権威を持つた貴族や聖職者達が挙つて参加（強制的に）するので、かなりの広さを要するのだが、この大審問場は螺旋を描く塔のように高く、円に沿つて座席が並べ立てられ大人数を優に収容することが可能だ。

中央にはポツンと一つの椅子が置かれている。

それは、常時ならば次期枢機卿や聖職者が座する物。

だが、今は常時ではない。

大審問場が使用されているということは、国内全土から貴族や聖職者達が収集され此の場にいるということ。

何百という威厳ある眼差しにキシリアは卒倒しそうだった。

自分には縁の無い場所だと思つていた。

だが、現実には今、此の場所に座している。

「わ、我々第六大隊は法王陛下の勅命を受け、首都ラパスを出立し南方に足を進めました。皆様方も御存知の様に陛下はリビュア渓谷にて奇跡の顯現を瞳に收めよとの命をお出でになりましたので南方するには当然のことです」

キシリアの口調はゆつくりしていたが、何処か急いでいる風に感じられる。

「南方するにあたつて、ルドン、ベルモ、アンダルスタ、ギエンダルンで大隊の食料や医療品の確保と休養をとりました。リビュア渓谷には砂漠を越えていかなければいけないので、事前の準備には余念を欠かさないよう努力してきました」

「……監査兵を呼べ」

枢機卿が呼出したのは第六大隊に砂漠越え直前まで付いていた私兵の事だ。

何分、戦の経験もない隊に何もしないでおくれるのは些か心配だったのだろう。

リビュア渓谷までの道のりに同行する筈だったのだが、砂漠越え直前の町で腹痛に苦しめられ同行を断念したというなんとも情けない実情があった。

「今し方言つた事に偽りは無いな？」

監査兵を宛がつたのは予定外の行動を起こさないようにする為の抑止力。

の筈だったのだが、先刻通り、腹痛でその役目を全うできなかつたという尻目があるのだろう。

枢機卿の横に立つた男から発せられた声は小さく聞き取り辛い。

「は、はい。確かに第六大隊はルドン、ベルモ、アンダルスタ、ギエンダルンで休息と補給を行いました。何の間違いも御座いません。ですがその、砂漠越えの後に関しては存じ上げて御座いません」

「ふむ、貴公が同行の途中に急激な腹痛に見舞われ監視の続行が不可能だったということは聞いている。砂漠越えまでの道のりに関してのみ君の報告を採用させてもらつよ」

情け無用と言わんばかりに監査兵の傷口に止めを刺したようだ。虫の息になつた彼はすぐさま審問場を後にした。

「ここからが重要だ。砂漠越え後貴公達に何があつたのか。事細かに知りたい。特に『あの』荷物は何なのだね？」

あの、とは言わずもがな、巨大な荷物のこと。

「…………ギエンダルン出立の後、補給物資が底をつけかけました。砂漠越えの最中でしたので帰還が可能な最低限の物資は残しておかなければいけなかつたのです。帰還するカリビュア渓谷まで突き進むかのどちらか一択。我々は最後の賭けを致しました。隊内で一番早駆けが上手い者を使い朝の内に出立させ、夜までにリビュア渓谷を見つけ戻ることが出来たらこのまま突き進む、もし戻つてこれなかつたら帰還を待ち諦めてギエンダルンに退去するという賭けです。」

どうなつたのだね？

何処からか、疑問が呈された。キシリ亞の話にのめり込んだ一族の誰かだろう。

もしかしたら第六大隊の退役者かもしない。

夢見る御仁には冒険譚はまさに嗜好の富む話だろうから。

「賭けは見事に成功しました」

疑問に答えるように、キシリシアは巧みに応えた。
威圧にも慣れてきたのだろう。

「諦めよう」と、皆で頃垂れていた時でありました。暗闇の中から馬の駆ける音と共に一條の光が我々の目の前に現れたのです。それは、早駆けを頼んだ騎士の松明の火で御座いました。そして我々は歓喜し翌朝、意気揚々とリビュア渓谷へ向いました」

「リビュア渓谷は未だ嘗て人が踏み入れたことの無い場所でしたから、人の手が加えられておらず、自生している木々や大地を轟々と流れる巨大な河川、雄大な景色が我々を出迎えてくれました」

「凄く綺麗で凄く壮大で心が洗われるようでした」

「入り口で立ち往生する訳にもいきませんので、兵士達を待機組と探索組に一分化しリビュア渓谷の探索を開始致しました。ですが、最初に立ちはだかったのは足の踏み場も無い森林です。一分化したとは言つても我々は大隊ですから相應の数がありましたので森を突き抜けるには無理がありました。人が辛うじて通ることの出来る獸道でしたので本当に無理をすれば進むことは出来たのですが、その分効率が悪くなるだろうと危惧しましたので最終的には流れる河川

を横切るという行為を実行致しました」

「その、時にですね……あの、」

突然じどりもどりになるキシリ亞。

自分の失態は誰でも知られたくは無いものだ。
ましてや、自分の口からなど以ての外。

「注意を怠った自分が河川を横切る途中に足を滑らしてしまい、そ
の……暫くの間、意識が無かつたのです。覚醒した時には大分川下
の方に流されていたらしく、田の前には褐色の肌をした男がいまし
た。」

「褐色肌の男とは、先ほど牢獄へ収容したあの男のことかね？」

声を発したのはまたしても枢機卿ではない。

枢機卿に対面する位置に座している一人の男が、キシリ亞をまる
で射殺そうとしているかのように鋭い眼差しを向けている。
身に纏っているのは貴族の証である真紅の外套。

外套の真紅に呼応する蒼き輝きを持つ頭髪は随分と後退していた。

「その、通り、です。お父様……あ、いえ、アデインセル様」

アティンセル。

クロニウス国内では名を知らぬ者はいない。

国家の立役者である大貴族の一貴族。

貴族の中の貴族である。

キシリ亞の家名である。

「奴を収容する際に負傷者が何名か出た。 あんな野蛮な男に何かされなかつたのかねキシリ亞？」

父であるヴァンガードとの仲は最悪である。

キシリ亞は幾つもの婚約話を蹴つてきたのだから、面倒を潰された父が怒らない筈も無く、大変險悪な状況にある。

今言つた言葉も表向きにはさも心配しているかのように聞こえるが、皮肉つているだけ。

自分の事をラストネームで呼ばせている事からも分かるとおり、救いようが無いほどに仲が悪いのだ。

「自分は彼に救われたのです。 野蛮という部分も否定はできませんが、意識の無い自分を介抱してくれていたようです」

「話を戻しますが、介抱され意識を取り戻した自分は、突然聞こえました怒声に驚きその方角へと駆けました。 すると、仲間が、仲間達があぞましい怪物と剣を交えていたのです。」

「怪物とはあの大荷物のことだね」

枢機卿に問われ返答する。

「はい」

「あれは見るからに伝承や御伽噺で語られた『竜』そのものだ。あれは本当に竜なのか?」

「はい」

「根拠は?」

「我々はあるの竜が火を吐き仲間を焼き尽くす光景を目撃したりしました」

問い合わせに對して答えるその声は震えていた。

「人語を理解していました」

「そして、伝承にあるように仲間達を襲っていたのです」

「では、聞くが君達第六大隊は戦の経験も無い、ハツキリ言つて鳥合の衆となんら変わりない。それが、どうして、竜を仕留めることが出来たというのだね？」

枢機卿の疑問は尤もな疑点である。

幾ら訓練をしているからと言つても実践の経験が無いのであれば使い物にはならない。

「あれは、唐突に起こつた出来事です。自分も気が動転していてあまり鮮明には覚えてはいないのであります」

「それでもかまわないのであれば……」

「問題ない」

「では……我々第六大隊に所属しているニコス＝レイディが颯爽と現れ竜に一撃を入れたのです」

ほお

という感嘆が周囲から漏れる。

「たつた一撃での巨体が倒れる筈も無いだろ？ その後はビックリしたのだ？」

雰囲気をぶち壊し、容赦無い疑問をまたしてもぶつける枢機卿。少しだけ、鼻息が荒くなっていると感じているのは対面しているキシリシアだけだろうか？

「枢機卿は竜の御伽噺や伝承を一度は耳にしたことがおありでしょう。御伽噺では、勇敢な騎士が竜を倒します。そしてそのお話には大抵、伝承から伝わる竜の弱点が存在していてその弱点を見事にして終焉を迎える」

「その時の彼は、ながら伝説の英雄よつな佇まいでした」

「偶然か（・・・）必然か（・・・）は分かりません。ですが竜の弱点である鱗の無い部分を突く」とが出来たのです

「竜を仕留めたといふことが……」

「はい。ですが、厳密に言えば竜は死んではいません（・・・）」

キシリシアが今の今まで、報告してきたことは事実であり、真実ではない。

竜が火を吐いたことも。

人語を理解した（・・・・）ことも。

仲間を襲つたことも。

全て事実

だが、眞実ではないのだ。

「どうこいつことだ？」

「死んではいません。が、生きているとも言えないの状態なのです」

「田を覚ますことが無いのです。何をしても

「竜の存在自体が法王様が仰られたように奇跡なのかもしません。ですが今の状態も奇跡に近い」

「何をされても起きる」とが無い（・・）ですから

真実を隠すことは彼に（・・）に対する贖い。

拒絶を示し大切な存在を失わせてしまつたことにに対する贖罪。

これはある方法をみつけるまでの時間稼ぎ。

「軍事、外交、等に最大限に利用してみてはとこりのが我々からの提案です」

「幸い、竜の回復力は凄まじいものです。ある程度傷つけることも可能です」

多少意固地になつてでも男を庇い、姑息な手段を用いてでも竜を生かさなければならぬ理由。

それは

竜を目覚めやらせる（・・・・・）方法を見出し、男に讀つ為の
時間稼ぎ。

贖いの旅、
償いの戦いが始まる。

第一章終記「報告……そして……」（後書き）

旅つていうか戦争つていうか
こんなの一回やってみたかつたんだ
今後にわざと期待！！

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまり阿波踊りを踊り
だします。

第一章 記「懸願」（前書き）

小説家になろう 勝手にランギングに参加致しました！！

押してね！！（強制）

こんなランギングがあるとは……

知らなかつた……（本当）

あと、今回はずいぶん短いです。

すみません。

男が田を覚ますとそこは牢獄だつた。

手足を鎖で縛られ、銀の首輪が施錠されていた。

黴臭い。

泥糞の臭いと人肉の腐敗臭が混ざつた悪臭が鼻腔を衝く。

「臭い」

唯一の記憶の中にある、あの黒岩の監獄を思い出す。だが、あそこもこの悪臭漂つ牢獄ほど臭くはなかつた筈だ。

「暑い」

蒸し暑い。

感じたことの無い暑苦しさを体感し再び苦言を洩らす。

「痛い」

疼痛。

褐色の肌に覚えの無い傷跡が無数に残っている。

無言が続き、静寂が世界を支配する。

男は、まだ朧げの意識を徐々に覚醒させていく。

そして、小さく、微かに、叫喚する。

「フルーチュ」

男の瞳には涙が溜まり、大粒の雫となつて零れ落ちる。

「フルーチュ」

呼ぶよつ。

「フルーチュ」

居場所を確かめるよつ。

檻の隣で牧草を食んでいた馬が、突然嘶いた。
黄昏る空の色が、幽暗な牢獄に侵食する。

橙黄色の光が暗黒を払拭し、彩りの無かつた獄中に鮮やかな色が宿る。

射光の源は大きく開かれた扉の向こうへ。
そこに一つの影があつた。

ふう

大きく深呼吸をしたのだろう。

吐息が聞こえるほどに吸つて吐いてを繰り返した。

「来るな！」

男は逆光の中での影を認識していた。
そして、明確な拒絶を示す。

「来るな！」

忌避を示しても、どんなに大きく喚いても影の主は近づくことを止めない。

少しづつ、少しづつ、僅かにだが、歩み寄る。

それは、怖々ともとれるし堂々ともとれる。

表情は逆光で読めない。

「やがて、悲觀しないで」トセー

顔が見える見えないの瀬戸際で、影は立ち止まり会話をす。

「貴方にとつて得がたい存在は未だ生きています」

声は震え、どこか哀しい響きを持つ。

「ですが、今ままではそつ遠くない内に、本邦（・・・）無くなってしまいます」

だが、覚悟を持った、そんな聲音。

「やがて、貴方に一つお願いをしたいのです」

これは、男に対する唯一の懇願。

「我々の手助けをしてくれませんか？」

たとえ罵りやつとも、たとえ憎まれやつとも、讀こと償ことの為

黄昏の色光に照らされた牢獄は、夕闇の空を象徴しているかのようだった。

第一章モード記「懇願」（後書き）

名々のサブタイトルが思いつかない……
どうしよう……

次回は反動で長くなるかも（こゝ強調）しません。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまり口サックダンス
を踊りだします。

第一章武記「酒、酒、酒え！」（前書き）

都の説明とか……。何があったかとか……。ニコスとデニスと放浪者の邂逅など色々説明の回。

思つてた以上に長くならなかつた……。（と）いつよりか一話に分けた

すいません。あと、ニコスとデニスはかなり酔つてます。
更新遅れてほんっとすいません。ほんと。

あ、ちなみに貴族の居住といつても仮住まいみたいなものです。はい。

首都ラパスは特徴的な地形の上に成り立つている。小高い丘、と言えばそれで終いだが、丘は丘であつても山にも等しい高さを誇る。

だが、あくまでも名称としては丘であるとされていふ。

傾斜はとても緩やかで建造物の立地や生活に支障はきたさないが、緩やかであるのに比例してその頂点へと登る道はとてもなく長くなる。

それが、首都ラパスがクロニウスの中で広大とされる所以なのだが……

セズ教の総本山でもある法王庁がこの丘の中心 頂上に位

置する為、参拝や訪問の際に多大な疲労を被ることとなる。

現に、先日帰還した第六大隊ですら緩やかではあるが途方も無く長い坂道に疲労の色を隠すことが出来ていなかつた。

大荷物を引いてきた軍馬やそれを補助する兵士達は、疲労の末卒倒というどうしようもない状態に陥つてしまつほど。

こんな、お世辞にも良いとは言えない場所に町を設けようとした意図はいくつかあるのだが、それも時の経過と共に薄れていつた。

今では民衆の愚痴に必ずといつていいほどまでに話題にされている。

確かに、商いの為に日に何度も往復しなければいけない、なんて人もいるのだ。

お小言にされるのも仕方が無いと言えば仕方が無いことなのだ。

特徴的なのは何もその立地している土地だけではない。

町や村、ましてや都となれば匪賊や賊徒に対する（要するに敵）防護策や設備等は常備しているものである。

ラパスも例外ではなく、丘の麓に巨大な城壁と唯一の門口である大門により外敵からの防護は万全。

さらには、城壁の内側にも幾つかの区域分けが施されており、区域の区切りの度に巨大な城壁と大門が建設されている。

現在では総計、第三区域まで区画化され、新たな区画増設の為に四つ目の巨大な城壁と大門が建設されている最中だ。

その区域ごとに出入りや入域、住居の転居などができる地位というものが限定されているが、絶対とまではいかないのが現状である。

仮に「区域」と云ふ区切るとしたら

第一区域には一般の民衆。特別な職や家に就いている訳でない、所謂、平民と呼ばれる人々の居住区域。

第一区域には聖職者や下位に位置する貴族（男爵、準男爵）の居住区域。

第三区域には上位に位置する貴族（伯爵、辺境伯、侯爵）と法王庁の立つする居住区域。

と、なる。

現在進行している第四区域には法王庁と法王の住まいである宮殿が入る予定であり、完全に他と隔てる目的で建造が進んでいる。

外界からの完全なる遮断により、法王や法王庁の神格化に拍車をかけることが多面的にある一部の目的であるのだろうが、今以上に

情報や現状の把握が困難になる可能性も否めない。

結果としては外敵が国内にほほいない現状だから問題は無いということになる。

ある意味脆いと言つてしまえばそれまで、だが、神格化させなければいけない理由というのも存在しているのだ。

そんな、いざこざや問題が奮起しそうでしない不安定な状況に、法王の不可思議なお告げと、巨大な荷物を背負い込んで来た第六大隊に役人達は東奔西走している。

一方、その当事者でもある一部の人間は、案外のんびりと酒を煽つていた。

「いやー、本当に息が詰まって死にそうになりましたよ。あんな所に一度と呼び出されたくないです。初めて入った審問場は予想外にでかいし、周りにいた顔ぶれなんて想像もしたくないほど大きな権威と権限を持つてる人ばっかじゃないですか。僕なんて枢機卿とアーディンセル様の二人に睨まれたんですからね……あん時はもう駄目だ思いましたから　　つてもう！　うるさいなあ！」

第一区域にある人気のある酒屋で豪快に酒を煽る髭面の男と狐顔の男。

木造の机の盤上には酒の入った杯と焼き焦がした魚が蒸氣を上げ美味そうな音を奏でている。

体型や客観的にみた性格でも、いかにも相反するような様相である一人が酒を交わしていることに、周りの客は少なからず疑問を持

つていたが、酒の席であるのでそんなことも水に流れしていく。

筋骨隆々の暑苦しい男達による喧嘩やそれを賭けとした無断賭博、娼婦を連れ込んでのやんちゃや豪快な飲み比べなど阿鼻叫喚の屋内では落ち着いて話をしている者など極僅か。

次第に、雰囲気に飲み込まれていく極僅かに屬していた客達が、新たな喧嘩や賭博、競合が至る所で勃発している現状に家主も何か言えどいいと思われるのだが、その家主自体が賭博に参加している為、もうどうしようもない。

この光景が、いつものことであるところとは、初めてこの店に赴いた来客でも分かる事だった。

「ぬう、此処はいつもこんな風なのだ。慣れねば煩わしいだけだぞ。話を戻すが、まあ、お前の思うところも同感できる。ワシとてあの場から即刻逃げ出したかったぞ……」

「そうでしょう」

座していた椅子を蹴飛ばしながら机に身を乗り出し髭面男へと迫る狐顔の男。

狐男の顔は随分と上氣しており、大分酔っていることが窺える。

「そもそも、僕はアーディンセル様の命令に忠実に従つたつてだけなのに、何であんな睨まれなけりやいけないんだよおー。どう考えてもあの場面は僕が助けに入らなければ隊長が怪我してたでしょうに。不条理だあー」

俗に言つ絡み酒といつやつだ。

とにかく面倒臭い状況に返答と言ひ名の疑問を呈する。

「ああ、そうだな。お前の命令の事情は少し前に聞いていたし、確かにあの状況では我々には非は無いと言つても問題は無いだろうさ。それでもキシリシア様はある男と何かがあつたに違いないのだろうなあ……それが肉体的なものなのか精神的なもののかは我々には分からぬが、キシリシア様があそこまで男に執着を示したのは初めてなのではないか？」

狐男とは対照的で、酔いの片鱗さえも見せない髭男。

飲んでいる量は狐男と大差無いかそれ以上なのだが、顔色一つ変えていない。

完全な上戸である。

キシリシアが男に執着を示したことが無いのは、父親であるヴァンガードの恩恵というかお節介というか、兎にも角にも父親の所為であることがほぼ確定している。

昔からお嬢様として教育してきたヴァンガードは乙女を守るのは鉄則とし、乙女が散ることが万が一でも無い様に男という存在から彼女を引き離したのだ。

だが、それも無駄な行為に終わってしまったのだが……

「そうですねえ。長い間の方の身辺警護兼、お日付け役兼、教育係兼、執事的立ち位置の人として接してきた僕ですら彼女のあん

な姿を見たことが無いですよ。まあ、アディンセル様の圧力で人の人に寄つてくる馬鹿はいませんでしたから、そんな風に思うだけなのかもしませんけどねえ」

「思つだけであつてほしいのだがな。……それにしても、キシリ亞様の審問はまだ続いているのか

「そうですねえ……かれこれ三、四時間は経過したんじゃないですか～？」

「あんな所にそんな時間、尋問されていたのでは身体が持たんぞ。大丈夫なのか……」

「僕でしたら無理ですねえ」

満面の笑みで返す狐男。

暫しの沈黙。

狐男は乗り出していた身体を元の位置に戻し、今度は机に突つ伏しながら口だけでちびちびと器用に酒を飲んでいる。
天井を三白眼で睨みつけている姿はなんとも滑稽。

「うわー、そんな可笑しな顔をしたら折角の顔が台無しになるぞ」

「そんなこと欠片も思っていないでしょ！」

「はつはつは。バレたか」

「バレる以前の問題ですよ～」

苦笑交じりに「冗談を言つ。

その場限りの時間稼ぎであり、話を逸らすための一つの方法。
一回目の沈黙の後に二人同時に勢い良く酒を煽る。
そして、同時に

吹いた。

「ボブッファアアアアーーー！」

「コブッ フアアアアーーーー！」

当然、吹き上げられた酒は水滴となり、前方にいる男に着弾する。一方は見開いた二白眼に、一方はその白慢の鬚と空気を吸い込む鼻腔に。

またしても一人は同時に苦痛に懾える。

「ワシの自慢の髭があああああつ！　なんといつゝ　ボフオツ！
！　い、いかん、髭に付いた水滴を吸つてしまつ！　く、苦し
つ　ゴフウツ！！」

椅子から転げ落ち、床で転がり激痛に悶える狐男と、呼吸しようにも出来ないという状況に陥り髪に付着した水滴を一心不乱に掃つている髪男。

なんと醜く諧謔なことか。

「ほんの糞髪があつ……」

「それは此方のセリフだ。この糸目めつ……」

そして、しうもない罵倒を交わす。

「あああつ？！」

「あああつ？！」

この時、二人は完全に酔つてしまっていた。
場の雰囲気にも、酒にも。

その所為なのだろう。

普段は、第六大隊の中では比較的冷静な方であるこの一人。
そんな一人が大乱闘に発展してしまったのは。

夜。

庶民の街の夜は喧騒に包まる。

あちらこちらでの夜店から上機嫌な笑い声や、喧嘩の音。
屋内から漏れ響く軽快な音楽に合わせて踊る人々の足音。
酒盛りの最中の大合唱。

道行く光景はどれも微笑ましく、温かい。

心の深淵へと沈み込んだ、明るく気高い気丈が再び顔を出す。目深に被つた外套を勢い良く拭い去り、そして、前方に投げた。

「ああっ！！」

男か女か聞いただけでは判断できない中性的な声音を発し、自分で投げ捨てた外套をあたふたと拾いに行く。

「何で投げたんだろうか？」

自身の突拍子も無い行動に自分自身で疑問を持ちながら喧騒の中を突き進む。

足取りは先ほどよりも軽い。

軽快なステップを踏み締め、壮快に足を振り上げる。

整備された道では無い、石や岩が地面から隆起した険しくも猛々しい原道。

目的の場所へと到着するまで、その軽快なステップは止むことは無かつた。

「……すごい、久しぶりだな」

見上げるのは仰々しく飾られた店の看板。

杯を振り上げ、腕を組み交わしている逞しい腕をした男二人。

その間に卵と薄切りにされた肉が盛り付けられた皿がある。

「よし」

両の頬を景気良く叩き、気合を入れる。

そして、放浪者は酒屋の屋内へと入つていった。

視認したのは、殴りあう鬪男と狐顔の男一人と、その周りに群がり離し立てる阿呆共。

そして、その阿呆共の賭けに威勢よく乗つて調子に乗つて居る旧友の姿だった。

第一章 記「酒、酒、酒え！」（後書き）

クロニウス神国は神権政治に近い国家であるだけで、宗教統治をしている訳ではない。したがつて貴族などが存在している。

筈……。（宗教統治でも貴族つて存在するのかな？ よくわからん）何か変だつたら指摘下さい。お願いします。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりフルツを踊りだします。

お知らせ

更新を一時休止させて頂きます。

理由は多々あるのですが、

もうちょっとちゃんとプロジェクトを練るのとこりとです。
安易な設定や構成の仕方により書きが書きづらくなつたところ
とが要因です。

え～ともしかすると新しくまた作り直すかもしだせん。
お気に入り登録や感想、評価を頂いた方々には大変申し訳ないの
ですが
某戦記さんのように改訂版として出すかもしだせん。

本当にすいませんでした。

その代わりといつては難ですがもう一つの小説。

結末の無い絵本

を不定期にですが更新させていただきます。

一人称なので嫌いな方なども多々おられるかと存じ上げますがご了承ください。

本当に申し訳ありません。

出来るだけ早めに戻つて参ります。

お知らせ その？ 一月一日再度更新 - new -

銀の首輪の小英雄 改稿版 を投稿しました。

一ヶ月もしないうちに帰つて参りました。
設定を色々と変え、終わり方を幾つか用意しました。
プロットも大分出来上がり…
まだまだ不定期更新になるような気がしてならないです。

現時点でも言える変更点

主人公の牢獄での扱いや偉丈夫との掛け合い（？）の追加
キシリアの男口調統一。
第六大隊と竜の邂逅場面を大幅に変えた。
放浪者の名前が決まつたっぽい
やつとこさ国の地域状況＆周辺諸国の状況と名前が決定。
第一～八大隊の役割、敬称（異名？）、などなどが大体固まった。
- new -
第一～八大隊の隊長、副隊長（幹部級）の人名が名前だけ決定（
家名はまだ） - new -
各国の外交的特徴等々を一新（？） - new -

主人公とフル＝ゲシュの邂逅、その後を大幅改編 - new -
加筆 etc . . . new -

大幅に加筆&修正 or 編集が現在進行中。進行状況：第二章一
話まで - new -

現状 投稿してあつた第一章までは大体の編集 or 加筆が
終了しました。（第一章の細かな場面除く）
が、何分忙しいもので投稿はいまだ未定です。
落ち着いたら一話ずつ順々に投下していきたいと思います。
new -

大幅に場面などを編集しまくつたので、全くの別物になるやもしけ
ませぬのでご了承ください。
編集が終了次第、改稿版のほうへ連続投稿します。
ご迷惑をお掛けして本当に申し訳ありません。

ぶっちゃけると、このお話はある地域（現実）での神話（？）。○
「民話（？）から色々拝借しております。故に探そうと思えば直ぐ
に出てきます（主にグーグル先生）
知りたいと思う人がいれば探してみても良いとは思いますが、今
後の展開がもしかしたら（ここ強調）分かってしまつかもしれませ
んのでオススメはしかねます。

¹理解頂けます様、御了承願います。

お知らせ その？ 一月一日再度更新 - new - (後書き)

プロットとか練つてから書けよと怒られました。
すいません。

- new -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4884o/>

銀の首輪の小英雄

2011年3月27日21時54分発行